湖月鈔

よもきふ

15

賢木

此巻ハ詞并哥を以て巻の名とせり　河　詞にハさかきをいさゝかおりてもたまへりけりとあり哥にハ神垣ハしるしの杉もなきものをいかにまかへておれるさかきそ　花　此巻ハ三十一二歳の事あり、源氏廿二歳の九月より廿四歳の夏まての事をのせたり

細孟曰　孟津抄ハ巻名一名松がうら嶋といふ　哥にながめかるあまの住家と見るからにまつしほたるゝ松がうら嶋とあり

斎宮の御くだり　細　秋好中宮也　秋好群行九月十六日御禊ノ秋事也　時日　孟　秋好ハ御代かはれハくだらせ給ふ也　抄　六条御息所立添て下らんとおぼしめす　御息所の事　細　葵上のうせ給ひし後ハ此御息所をこそ源の本妻にも御なり給ふべきらし世の人も思ひしをそはかりてうとくなりて給をうらみ　細　野宮に　群行　秋好の御もとにて后の姫　細　源のう

斎宮の御くだりちかうなりゆくまゝに御息所もの心ぼそくおもほす　やむごとなくわづらはしきものにおぼえ給へりし大殿の君もうせ給ひてのち　さりともと世の人も聞えあつかひ　宮の内にも心ときめきせしを　そのゝちしもかきたえ　あさましき御もてなしを見給ふに　まことにうしとおぼすことこそありけめとしりはて給ひぬれば　よろづの哀をおぼしすてゝ　ひたみちに出立給ふ　おやそひてくだり給ふためしもことになけれど　いと見はなちがたき御ありさまなるにことつけて　うき世をゆきはなれんとおぼすに　大将の君さ

抄 源よりかくおかしく貪欲の心やうたの名おもらしくともなく強くもひかへて一筋によいせんへ
てりまうんの用ところ 細 河海に愛献院の石付親子女王のみをひとり此例作れたる延喜以後のてゆるされ
親子ひて
八例に用さりは此相信の例くされ八例をとしるにかけり とし八ク々りの花 村上御女親子女
王天延三年に為欽文下向しまふ御母親子の女御徽子女王始親王女称子とひてくでりまへり
師との相信に六条御息所を徽子女王にあまうくへて作れはこれより出てくる母子おなしく
下向の例なきによりてうくはうつるなるへし 河 愛献院の石付欽子親子女王なりかくに母
の欽子なりつくもおはしらかにてもとてせよふれは又もさしなりもとり山荘の今にな
おりやまうれん 抄 荒急の従西白しきまく

人てころつきまう
細 御息所の心中く人とは源なり 孟 人は心つきなしと源の思ひ給はん
抱めは給はぬと源をひきんて
とこやまて所の思ひたらんと
心づかひおもあるへし
抄 若まして御息所のと文
源へ対面あらましきことに

さすがにいまはとかけはなれ給ひなんもくち
をしく思されて御せうそこばかりはあはれ
なるさまにてたび〳〵かよふたいめんし給
はん事をばいまさらにあるまじきことゝ女
ぎみもおぼしつゝ人は心づきなしと思ひを
き給ふこともあらんに我はいますこし思ひ
みだるゝことのまさるべきをあいなしと心づ

ほと迎りと案して業に
地よりなるゝ 細 六条京
もとの殿なりは 御息所けしく源
ひまうて 栞日
よろしきくほんよ 細 此せ
六ハしたやもく念りよ
つき所よおりもしとゝ 孟 亦
まて御らす所すれハ係り
にひとさ所とく
定のん中なくしき
細 桐壺帝御悩なり此
巻の末に崩御あるなり
おこりし 栞日
九月七日ハなうれハ
細 十六日斎宮ハなり 孟ハ
まこと 栞日 明 髪ゆ時衣
又 髪なりなり 栞日

よくおぼすなるべしもとの殿にはあからさ
まにわたり給ふおり〳〵あれどいたうしのび
給へば大将殿えしり給はずたはやすく御心に
まかせてまうで給ふべき御すみかにはた
あらねばおぼつかなくて月日もへだゝりぬる
に院のうへおどろ〳〵しき御なやみにはあら
でれいならずとき〳〵なやませ給へばいとゞ御
心のいとまなけれどつらき物に思ひはて
給ひなんもいとおしく人きゝなさけなくやと思
しおこしてのゝ宮にまうで給ふ九月七日ばかりなれ
ばむげにけふあすとおぼすに女がたも心あは
たゞしけれど立ながらとたび〳〵御

いそやとハ　細引なるよるふ
へかしきともなく　無用之ことは
なひなるゆへ　河間紙どの
こゝろもとなくいへども物にあつかさを
いそやんハ地わぬすきにて
あいそやとハ人とやそれし
ありひとりて　おのづとにて三
どもとつふやうのものに所よ
よりて　師　いそやたおのき
みて轉とゞなき源の人を
とそ對面を地か所ひな
なりとく
むかれいかりて　抄　理痛に
源の之しく源を尺給いそお
おりのすく立しれんなりそ
くろけき野辺を　抄　秋風より
源のおりもて秋の頃の
そらしれ給海を　ひいる
地の音をもさえく
細　猛なりし給く　琵の音に
寒の松風かいかしいつれの
すりなる人勅ろんともかく
下　秋ち女出皆なれそ
ひなくんちひて面白し　異白

けふうそこありければいそやとは地ばしま心
細　さうハ地にかりの對面かし源を行給之
づくしあきかぜにうみはすこしとほけれど
りのむかしのゆきひらのちうなごんと。ひとえにかれど
せきふきこゆる。旅の　のべ　すまのうらなみ
旅よるはげに地かるよる。枕のうちあれた
まへの秋の　所哀くとるつゝみなさしぐれかうらもゝかれくなり虫の
抄　面白く　ひかけ哀行く
ねよ松風もよく吹あかきぞそのとしも哭
抄　琴の人をよりくたり
そられぬ程よりれく程どもうしくさとし
るかはとえんかりむ河あしさどぎん
細　十人わすら
ばかりとしむく
ぞかりまずハぞんとぐもきとまぐるする
でいちうるのびまてまてこをひいさつくろひ
ありき入らされて
あへるはようハいと娯でくるし
源の人　いかれ

かゝんみるりしこて
孟源のめしまうの面白し
まうらとうまて別とよ
とおり
抄　なかひけり小筆作
細　地表の山本のこ伝之大筆
會の道を業とそて極り也
表武よろしこより懐紙の
人し花定式よ大筆會
の道人業を指て道とむろ
うしてより秋の野
え大学をよくなり　孟太孫
え道人業をりて治よまかく
不浄をとりそしれゆゑ之
あかりく　細　そしくとたて
さきかく　師　花鳥に顔之
あもりよ何てしとたん　ゑく
下よ御合かるとふくん
とりる　抄　ち吾又衛門書
吾八天の字をゑてとそうて
術お吾を立るも天地の間よ
人とお入るんゑて
きてがなくしく
細　術くもく之　師りそめ

ともかりそめのやどとの所ならば。すまて
しまそ地りつけるかろぞかるをもかくていまく
でまちいるゝどうきりつゝんとすぎあめりうき
人やしより地ばさむ抱ちのありけかうらしく袋
抄　道まうりの道之
地月かきりまそいかやどもあくらりくいとうり
表　皮つきうろ木とつえ　孟同
板屋
そあかなるかる。ならぎのとりまみどもへきを
がまかりぐしくいへはたてきつれてはつらえ
細　術之
しきぞれかるよくんづくさのりのどもこ
りとをよう心ぞあもぞそとのうどうりのい
とも。ひさやりとぞるまちかりて。ひろげいく
ひちうけそんかどもほりよんき海のかりて
かくたへかくしてこてよりの地やかきとの。
中夏のの中を源の安かる之

かれ代系くもくもつとくまつりつきなる紀なるみとハ系るの本かなれてまるるにはく
くり治ゆるく盃系紙の本へえんきるハ紙りつきとく
大さるや 盃火爐屋炬舎 火爐 順和名 細 春 変みち者本開の本まかの野変の八系服の内きさ
庵し大炬か人二人山城葛野郡秦氏の童女を助く由延喜式にく神供なとをもとむる本
死るく 先句

あそびハみそや先そく
細 上の相よきのことあさ王
くみよのく書とりとさま
盃同

かれしきしりハ
大ねえらくとし泊まかの人を
泊泉本とおかりきつり路
とくらくうしとくくしくハあり
こ城わりさこるりをりくうくハ
せまりしとこととく

月日とへぶてまつらん程と城はしやおまはと
いそどうし狭よんぐうし水のさいのさうへきと
源のく
ころよきらくれまひて泊をうそことさ
あまおそひハされやめて、んめくきけさひ
あまさ吹風、なみふされの人ぼその世をうそ
こえうりそて、川わらハさひめんしまへさ
源のんつきさるく城わりさく
き海ふとあしねハいとりのしと城はして。
細 源の句之 盃 大おきれハおりさき うれくとすりねとく
くやされありさもいせはつきなき程 り
なりうそ絹城わりしきつりべうう忘めれおり
日比のんりとるさとまくろりへんとく
よハりそるり 海りでりふきう俗事しなさると

とめのお 検白随 出紙よ
云中へもとれおりねるまを
神事のまうされハ忘めれ
それとハりて
いまはくよつまりしさるす
一さひ源のまりとさひそる
まそ浮落一しおもさんとお
り妻 此那変の一しおりまう
よえりて源ありあへん
る人今更よ治くましと
なり
ろけうくねへ 細 とけうう
ねなされハえりけ申されさ
まくちろ 師白のとも
きすり

あきつめ侍みしぐれとあやうるよ中の 八ぬ人
きまさるく
バ人ぐげみいくくさちうらいてうきらうあづ
源のく
らくせ治よいとおしきどあのうひさうせ
細 泊泉本の人之
まバいやこての人めをうくろしう、うの城む
細 秋変の琴
きんこうもいくくとせ
さんとをわりくしう、いでおんが、いまさう
出て居むく之
よつまりしまくくかがとよいとりのうれ
どかさけある月そるさんみふじとけうりね
源をく
バどうおけげさやもとうひておさりいぞあ
色うれけそひいとんみくししるさへまくのこそ
細 源の句之 師 神事の本子
まハくのまよりや
くりの中うされハ何やとそ、のおりねとまくり
夕月夜 星純 暮月夜 下
そるやりよさしいくくらゆふづくかよきうら
かりまひまへるさ海よおひまあるの かりく

月ごろのつもりを　花 此段の
心を伺ひて云へるなど
しまへさへぞ聞えぬなど
今さら語られんに其無き
あかしぬるなど　細 源氏の
心をかくさせ給ふを榊の文
まゐらせしのみなり　呼曰
榊ハ不変をたとへし也これ
もうつくしと思ひ侍りし
後撰〽神垣山の
榊葉ハ時雨に色もかはらざり
けり　河〽くもまよ
きるまでも[illegible]ぬ榊葉
くさや人の心をいとえ
らん
いかさまにして過ぎぬらん
細 ちはやぶる神のいがきも
こえぬべしとハ大宮人の
しのぶぐる[illegible]　河曰
師説云ハ於遠に人見の事
世　花 ふる振舞の[illegible]
もこえぬべし大宮人の[illegible]
まくほしさに　師説云ハ
伊勢物語よりいでたり

めでたし月ごろのつもりをつきづくし
う聞えんもまばゆきほどになりにけれ（折ひかくさ之）
ば榊をいさゝか折りてもち給へりけるをさし（河 賢木 日本紀 坂樹 日 榊 俗字也）
入れてかはらぬ色をしるべにてこそいがきをも（内 廬の前へ之）
こえ侍りにけれさも心うくと聞え給へば
（御息所）神垣はしるしの杉もなきものを
いかにまがへて折れる榊ぞ
と聞え給へば
（源氏）少女子があたりと思へば榊葉の
香をなつかしみとめてこそ折れ
おほかたのけはひわづらはしけれど御簾ばかりは
引きゝて長押におしかゝりてゐ給へり心に
まかせて見奉りつべく人もしたひざまに

すゐりハさうこのいがきをこゆると云ふ神のまゐるよさゝりありて
さもいうくと　源の心ハかはらぬを御息所ハ源よあまりなるを仰しきのまよ
榊がさハきる也の枝も　細 御息所の前へ[illegible]榊ぞとハ
らひきさす也枝よそへて門のあを入くゐせそて歌あるへもあしかどとふ
しりし也いかよまゆく[illegible]をてやかぎのもの　師 此文の榊がさよハあらし此枝もなき
といかよ折まへて榊をあるべくとして色へたまぞと云之一説云 公ハ歌の心をいさゝかもなき
抽をとく御息所ハさしも心つくからせしとうひかびり給ハよの御詞ろかどよまゝべ
その心しりけれてく[illegible]で文々かはらぬ文をしるべにてとおもふそこと
まりいかよまゝへてとへまされしろ也んやと云ひけり此所引よ能之云々
をとめ子が　河 未通女 万 少女 日本紀 通女 孟日 細 榊葉の香をとめこまでたづね見ゆる
人もしまいる也ぞうか　御息所のことよいかまゝへてまうでゆきいまゝへてたゞさ
ひめこのるれをさしてハ霧めてなとやうよりきうがましきを源の返事ハ御息所のきん
あらうとこうくまうてしてそ榊の香をもとめてとめそハまうりくれこく
へ[illegible]こゝうひさ御よ　細 人をとへ御息所の心さひさ御よ出給ひし程ハさもしるくて見えと御よ見え
思ひの外也
まことゝろのうちよハいかにぞ
やきずありて　細 物のまに 哢 孟日 まことゝろ
御後の[illegible] よハとハ明 心よ久
りせこゝろよのこゝく
めづらしき御対面　細 此程中
絶えたる故にことにめづらしく
思給し 孟 御息所 源よ対
面なり

おぼしたりつる年月ハのどかなりつる御心おごりにさ（いつまでもあるべきやうに思ひし也）
しもおぼされざりきまた心のうちに
いかにぞやきずありておもひきこえ給ひに
しのちはたあはれもさめつゝかく御中も
へだたりぬるをめづらしき御対面のむかし（かくまで恋しきも）

女はさしもみえじとし
源は心よわきさまみえ
じとつゝめどもしのびあへ
ぬのうれへ也
いよいよ心ぐるしう
抄 源の心よりくるしきさま
と云へば御息所も思ひ
あへぬ事をきこえ給ふ也
心ぐるしく
拾 しとまるべきこと 哥
まつのそなたをも源の
とゞめまゐらせ給ふべきを
とゞめ給ふやうなるべし
月もいりぬるや 細 七日頃
遣は上の句に物やおもひ
出る夕月夜とありしに
あへり 哢 孟同
こゝら 細 おほくのことそこ
らとハあまたの事をいふ
こゝし
つらさもきえぬべし
細 御息所のうらみもき
えぬべきこと 明 恨心中
和らぐ事 霽 青 又成盛

ぎりなし。こしかたゆくさき思しつゞけられ
て心よわくなき給ひぬ。女はさしもみえじと
物思しつゝむめれど、えしのびたまはぬ御けしき
を、いよいよ心ぐるしう、なほ物思しとまるべき
さまにぞきこえ給ふめる。月もいりぬるにやあは
れなるそらをながめつゝ、うらみきこえ給
ふに、こゝら思ひあつめ給へるつらさも
きえぬべし。やうやういまはと思ひはなれ給
へるに、さればよと中々心うごきて思
しみだる。殿上のわかきんだちなどうちつれ
てとかくたちわづらふなる庭のたゝずま

されたるうしろめたく 細 御心のひきとゞめ 抄 是は御息所の心中也 前よりつらき事のかさなれ
どありて下向を定め給ひしを此比やうやく治定しつるに それを今又源のとゞめ給ふとて物ぐるほ
しとおぼすれど あまりにその方へ心のひくにそれを御息所の心よりも心よはくなりなんと思ひ
よまことはさやうにあらうとも思ひまどはるゝ 師 源の物思ひせぬさまの物思ひ源
の御ありさまにてかゝりて心うごく也 細
殿上のわかきんだち 細 葵巻に殿上人より 物夕の露 なにかくと云此の後にもさんまうと
ことともなく

曉の 細 源の御かへしにつゞり
出ることのほかなる曙のそらをそ
うらの方にも見えざるゆゑ
とけ時の心おもひやりてみる
べし 花 曉のあはれのうち
人ハ何方の物をそてと思ひ
さる別せましや 哥く
大底四時心惣苦 就中
腸断是秋天 秋兵白
師いつも曉の別ハ源は物
かなしき物の別ハ一入袖
もぬるゝさのあはれ也

げにえんなるかたにうけばりたるありさ
まなり。思ほしのこすことなき御なから
ひにきこえかはし給ふことども、まねびやら
んかたなし。やうやうあけゆく空の気色
ことさらにつくりいでたらんやうなり
曉のわかれはいつもつゆけきをこは世
にしらぬ秋のそらかな。いでがてに御手
をとらへてやすらひ給へる、いみじうなつ
かし。風いとひややかにふきて、松虫のなきか

霜ふくこまゆみねまで
細 実のつくりあしらうやう
なうきいそていはゐろ秀逝
もおろへさせまさる者も
なきさとかくて 明 京よ
あへ八癡スト 東坡もそう
花香るふうへ沙汰あり
大かたの 細 御息所の哥之
此別八哀ふかうすろうたん
也よ只秋の感なかりしうた
かすてうち添へあれの松蟲
とハ面よハなぶらえうかり
花香るよ此たら面白し
師此哥も源氏の哥と云
侭あり不用 花名無へ等
よ喜し
榊さうす 細 源の心之此
給さしくるかしとぞうり
ここ名よそなうの別
と出来あれと後悔あ
あく
わりきんてハ身よ入て
御息所の心うれしくハ分志
めれうらの榊を答られ

かくしつゝ恋をかりそめなりとさし
てよそとなすさぶらひてもつらげさけなり
（源と御息所の中へ）
よすがてわりなきれんぼひとつにも中
くこゝもゆかしや
（御息所）
大かたの秋乃わかれもかなしきになく
（孟 源の心をそう）
ねなそへそのべの松虫、くやしさこし此宮の
どもひなれば明ゆく空も色くらしまく
（悔さの送之）（御息所）
て出ぬるらの榊いと哀なる女もえんにつゞよ
（出舎すへ）（人くの源のさ海を）
うんぞ名残あはれぞなりまし、おもひを
（孟 源の御波あく）
てまろうまくる月ゝのいろうつの紙と海
（源のうら嘆之）
進る女かいかなるわかきんでもある身よ志め
（細）
ておやまちゝもゆるべくめでてこそ色いりに

しら源のあわうき海とうして
ハいうきとおもうこえ侭めへく
源を身よ志むぐうりめそ
こゆくし
いうえうり此志ますてう 孟 いまへ
御下向すらハと皆女房流
同く師何程ゆでなるそ
ね道かうりも源よハ別
なさうらんとそく
えうらへし 孟 源の御文よ
て御息所の伊勢へ下向の心
素設いまうらをとく
やとこハさしも 源ハ御心よ
さやうよわうく此すなねです
ずいは後いしく云須ゝ前
のすど御息所ハ源も召へ
てあうれ此あわせそうく
藤の御きうそく
おゑく源うりそのうひ
すのへ師 御息所の女房来
詞度をかく内の女房をきる
とまへしよ告しまやそ

（人くの云なり）
うりのよろみぐくうかのはゆありさ海とこそ
（御息所）
てそもわうれさうてしんとあへすくなさうござ
（細 源よりの文之 師後朝の文之）
あつうかおもつひまりもこまやかなりハ猶
（の下向を思と留りうひめへく出すハのやうへ）
しなびくづりなれどもまさうらんへしさざ
めるひまへきことするくねでいとくひなしれ
（細 幸よ他之）
とといさしきも猶ほさぬこと。ぞする。なすきけの
あまいうくいひけぐきあべうめれバかうして
（御息所いく）
どうなんへてのつくゆはゞ出舎して あへさうしれ
（伊勢へ下向のよし）
なさのうくてそむききあひそんとするを、口惜し
（源の心を察してえ之）
うをいとゆしうも惜げしなかむくし藤の
はさうぞくうらうでめへんでのきそでなするよ
謡 度
くれのはでこゝどなどいかめしうめづらしき

不定なりけり　抄 世の中の事ハ不
のみならひてありとあるもの不
定なりけるを今治定しさ
る事もしくこそなく

何ともなく人は　細 世のつねの人の
数ならぬへき賤しき心をつけて
ころんとく一向数ならぬ者
ハやすき物也此御息所ハ
何となく人よりぬきいでたる人
なりと此源のこの事也
の嫌ひなく
あすか川　細 飛鳥川の淵瀬也
是 秋の夜の淵は昨日は今日は瀬
それは瀬のあさきあり 揚乃
なくのみ中将麻衣とな
かの事なく 孟 明日

さ海ふくらみつゝひろくしるまでしたがふによしなき
ばかれども、おほくしうつろふき君をのこ
なずして、おさなきより身のおこなひを、いまゝで
めさるんやうによ、ほどちらくかうまくみ梅さき
みなけしき終りに、飲ことはいわりされぬよ、不定（ふぢやう）
なりつゝはいつぞしらのくさぶまりゆくと。
うきしとのこゝろしまり、世の人（かほ）いたし
ほとゝぎすも衰ふるも、海くるまこゝろ
べし。何事も人よりすぐれさせんと
あくやまひかわりなく世にぬけおぬらん
のれわかりハ、ならん事をさきにもとすんなる
見かつ川ぞそれにちる人ある、つねのふち

長きよし　細 花ある所にみて
より花は 雅治の日比前
と勅使とハ河原と借なる
して降りまして長奉送使
ハ侍従まで借まして上路
の時より湯殿にそてるれに
くはり下ぬの中と奏を
中納言奈保にし 間一人被
宣下之被あ　細
院の御心よせ　故奈良の比
るまゐ院の比つ大路よ登路
しある孟日
ありくも　細 花は秋天へまいらせ給ふへ
らせ給ひけて見ゆんきよ
それあれどもののそ　明
長カケヘクモニカレコケレトモ 室町殿之 掛
かわ秋さなしこそ　細 此思ハ中
ところけのかハ此殿まゐらされ
御色天の京ふとどらう
なる秋も二本をべらる
物くハのみをその路へ　葉日
八幡より　細 国府之祢八地
一祇を奉仕山祇とまくハ
山づミト、祓ヘ地祇一切の祢

よまうりて、ちやうぶつうしなはしなはれ
のん大臣多あり 花の書
んじゆうめぐやむじゆくなりし、あたりは縁え
らせまつり給の何てろよせもあれば、おうく
しれず 秋天皇の御ともに花に祓はりて 細 御息所の御方へも
しげなる、何ども御殿より例のつきをぬ
すく所へして
とくまし、なくまうらけ、海くこそして、これ
まへよそぢふまつりて、かゝる神ぶるめしそ
　木綿よまとつけて　文月
　源氏　神祇 神
やしなひかくよ、川こゝ神をも心あれはあり
ぬすられの中をこともれしおありまるよある
　細 さてもどこかあかねともし 旅日
絶こゝらし給ひれとあらいとさはりしき候ど
かれどもれ人つまかのことの比ども、女別当し
　御女子の仮名あまく
てうせてまつり
　秋なき
ふる河のそこくよふことなる中なるは

とくりんとあく嘛日明 伊弉冊尊生淡路伊豫筑紫壹岐薩摩隠岐佐渡次生大日本豐秋津
洲謂之大八洲 所以称二島八者 八寄宮を國にたとへて云こ わがわかぬ歌さとをとりまき
あれのかく
別當 細 歌の別當也 花 延喜式によみてたり 嘛 との世かと濱云閑白家をも別當の居
くてあるへ五日 師歌の反せ之
うらつえ 細 るとふかんとく八王将の備とをふれつきも 盃 うとふりてく八夫実のかくて
かかさこかり

まのれえりの 細 此哥の下白
とうり歌の所をかむ
やとうしきせ
かやくよまいよる
細 抄抄今もとくき格を
おわりく源のれえせく
評歌云でくいのつひまぶ
つるわりうさ事よはんのる
かう源のらせこ

かゝ給ぶりてさゆげやうぐたんたねい清有
ほゆしうてげうらかもまつくもをしう於
きどうちをそこれてこおうらんもひと主
ろうらしき事へいはかりとまりてつまく
よかりあねあくりたえのはえうきかも気く
しき給徳くあそてうねさすくり 於との名
とうりいおかしうもかもえへさあしてう
らえそえつまれいよぶつるまづくきてしさよ
きすしれてらりはくをしてそいとのう

いとけなきに位を 細 御息
まうちひてわくまう
いは歌文とも云ものそ
えうくきてこれ也 所歌文
いとあやくまえせり時ハ此
息所の方よおもむせしうへく
源のえふよへきなりよんなき
くてきもあり里をねかき
とかん
世中 きめかられい 細 文も
差ひすくうぞも出へきとよ
物之内よ源の心ろを年
給し 於 此代のふうりめる
とよ八寄文うりわとよかれ迄
きりのとくようらこは ともの
とり中の時そわきかに
御 斉文解所の日ものお
てうくよれりりあわき
御息所あしよ 死 歌王にを
こきかくかつしまむ内の出気
世のときさしあく清典よの
え今の歌文八千里よかり
のえれ息所ひて下り給
ふよりて因典とそ申へま

まくそてさうつくらしいふけるさく汎澗
どうきをかりめりてそれきをまれ世中ぞ
めかされべさいめすをやうもあらかんう
かとかはびそらよらてあうれけ ひされ
細 御息所のかわくあうまのみえう
ばすめを車物はりる日かりざるの時にたら
辟 ひとうち車く
よまつり給ふをあは所れらしよのらに
御息所の文をふく
つけてもらりゆうくのきりかしき給ぞる
若 彼へ御息所の内をいわうしく
ゆかりんぶしていつきしそまうりあひしま
さ海りとらそとさの世よぼうらへきら給
御息所のかなし
ものまつこきをんおかれよかりきさ十六うて
若 彼之 八夕手
こらえよまうりあわし女てそとられそかわ
若 彼をて 九重
まよふ女そそぞやうさこつのへきとこ給

いり給ふ御輿ハ葱花を用らるゝ也らく一しよのみゆきとなるでうらうらうしく
内ハ必しもにゆるさるゝ也 抄 細 斎宮幼稚なる時ハ同輿あるへし但御不審あり
ら今斎宮十四歳也同輿の義ならとみえて但鈴鹿山以後ハ及ふへからす也
又親子の 細 御息所の文字の[illegible]
ことに[illegible]まいり給ふを院の御事の[illegible]
十六にて故宮にまいり 細 東宮に参り[illegible]
花 御息所ハ十六にて故宮にまいりて
立坊ハ源氏十二の年の[illegible]
どの例也 牡丹花の[illegible]十六にて故宮にまいり[illegible]
[illegible]故宮坊にまいり[illegible]
八歳源氏四歳の[illegible]源氏廿二歳に[illegible]
を不の年[illegible]不審の事あり
[illegible]
人業工年と来の[illegible]
そのかみを 細 今日ハ[illegible]
[illegible]
斎宮は十四にぞなり給ひける
師 源氏九歳の時[illegible]
いとうつくしう

御息所
そのかみをけふはかけじとしのぶれど心のうちにものぞかなしき

御息所
斎宮は十四にぞなり給ひける いとうつくしうおはするさまを

わ[illegible] 細 [illegible]
[illegible]明[illegible]天皇[illegible]
[illegible]御座の[illegible]
[illegible]斎王の額[illegible]
[illegible]斎王[illegible]
[illegible]一代
別の櫛といふ[illegible]
[illegible]八省[illegible]
細 大極殿の[illegible]
八省 [illegible]八省也[illegible]
[illegible]出車ハ八
[illegible]大内也

てまゐりたまへるぞいとゆゝしきまで見え給ふを 花 帝御心うごきて別のくしたてまつりたまふほどいとあはれにてしほたれさせ給ひぬ 斎王の御作の女車 いで給ふをまちたてまつるとて八省にたてつゞけたる 出車 どもの袖口色あひもめなれぬさまに心にくきけしきなれば殿上人どもゝわたくしの別れおしむおほかり くらういで給ひて二条より 洞院 のおほぢをおれたまふほど二条院のまへなれば大将の君いとあはれにおぼされてさかきにさして

源氏
ふりすてゝけふはゆくとも鈴鹿川やそせのなみに袖はぬれじや

殿上人ども 細 御息所の行方の女房に恋ひなどもせし殿上人もあるべし

二条よりとうゐんの 細 二条洞院のそば也 花 弄 王 二条東 輿出昭訓門至八省東路南行至郁芳門路東折至美福門上南行出東掖門経二条大路東行至京極

をれ給ふほど 此御息所の下りまふるも八十瀬の河と [illegible]

[illegible] 御息所のそば [illegible] 抄 [illegible]

の榊をさして [illegible]

すゞか河 細 [illegible]

八十瀬もせよ [illegible]

[illegible] 思ひおこせん人あらじ [illegible]

[illegible] 細 此御息所 [illegible]

[illegible] 思ひおこせんと [illegible] 哢 孟同

いとくらう物さはがしきほどなれば

の日関のあなたよりぞ御かへしある

すゞか河八十瀬の浪にぬれ〳〵ずいせ

までたれか思ひおこせん ことそぎてかき給

へるしも御手いとよし〳〵しくなまめきた

るにあはれなるけをすこしそへ給へらま

しかばとおぼす 霧いたうふりてたゞならぬ

あさぼらけにうちながめてひとりご

ちおはす

行かたを 細 源氏の君の詞也 面白き歌也 [illegible]

孟 伊勢の [illegible] 師 南底の別 [illegible]

[illegible] 抄 [illegible] 御息所もとゞまり [illegible]

孟 今泉流の [illegible]

師 [illegible]

孟 源の年齢 [illegible]

ゆくかたをながめもやらん此秋はあふさか

山をきりなへだてそ 細 紫の上の方へ 西のたいにもわたり

給はで 人やりならずものさびしげにながめ

くらし給ふ まして旅のそらはいかに御心

づくしなる事おほかりけん 院の御なやみ

神無月になりてはいとおもくおはします

世中におしみきこえぬ人なし 内に

もおぼしなげきて行幸あり よはき御

心ちにも春宮の御事をかへす〳〵きこえさせ

給て つぎには大将の御事 おはします世に

かはらず 大小の事をへだてず 何ごとも御

うしろみとおぼせ よはひのほどよりは世を

まうとにも世あ　おき　くる

らんささよむ
此御方のまくさめかくるを
こうへよみふう

まらうとにも、ありさくとくりあそはし
うけんとのみおほしすずせ中うけりいたう
さうある人なり、さうなまりてまゐりくり
さまみことなるうへに人すく、御供やけ
のたうしろきどせさきんと思ふまへしかりその
らしらへうせ給ふしおくられなりけるゆいごんど
とひ給ふきれど、女のまねかべきこしかし
あしねどこのうこえしきまえこりてこし
みかどもいとうおしとおぼしてうしろへ
きうくさくすまじきうしとて人をくきうくえ
させ給ひにうちもいとうつしまねひきさ
らせしまんなどうれしくものりしくこさ

もとめもてまひかく
細河幸と一度かく出
しられと池田かえく

ゆゑとすくられしと
細
すすゆ衣　姉孟日
師法雅八ゆくもぬかさて
流のたまくをうれしと
かゆいらく
まろ川のすと　細延喜
御門宇多の御子のうす
李アま記ゆ海よありけり
河云李部王記云延喜御
門寂後御薬之間春宮
朱雀院七歳御時御舅
貞信公為御供参内主

てまつらせ給ふがかりあれはいそがしくらせ給
ふも、中くゆかうしく御ほくなんありしさもひ
とさびみとぼほしめしかれどものにはかし
きまはり、日をへて見たてまつらせ給ふ院と
しの給ふりいはとるび川かしさ院さ海ま
てたしくはひうくさせ給ふう院よりけれ、な
よびあつくられしと笑しそこそまうり給ふ御気
色いと気なり中みむいるするよまうこまゐるとを
ふそまつらせあれど、海ぐれこうろえられて
御がめさるるよう川のことうことしてらせまへ、
いとりのらるるされかしうれしうかうめうくられ
しまうるそまつらせ給ふ、おほみとも、御用や

上御對面之間有五ケ條御遺誡。一者可專神事、二者可任法皇、三者可用左大臣、訓四者可寵古人、其外一ケ條ハ御忘却。春宮御退出之時左大臣被筆向之、非記正文、取其意。孟明日

[illegible] 冷泉院の [illegible]

細 夜更の出御之

孟 [illegible]

細 大后の [illegible]

わか世の [illegible]

花 [illegible] 世の政 [illegible] 連綿 也 孟日

おほやけにつかうまつるべき御心づかひ、この宮の御うしろみし給べきことを、かへすがへすのたまはす。夜ふけてぞかへらせ給ふ。のこる人なくつかうまつりて、のゝしるさま、行幸におとるけぢめなし。あかぬほどにてかへらせ給ふを、いみじうおぼしめす。大后もまいりたまはんとするを、中宮のかくそひおはするに、御心をかれておぼしやすらふほどに、おどろおどろしきさまにもおはしまさで、かくれさせ給ぬ。あしをそらにおもひまどふ人おほかり。御くらゐをさらせ給ふといふばかりにこそあれ、世のまつりごとをしづめさせ給へることも、わが御世のおなじことにておはしましつるを、帝はいとわかうおはします。おほぢおとゞいときうにさがなくおはして、その御まゝになりなん世をいかならんと、上達部殿上人みなおもひなげく。中宮大将殿などは、ましてすぐれてものもおぼしわかれず、のちのちの御わざなど孝じつかうまつり給さまも、そこらのみこたちの御中にすぐれ給へるを、ことわりながらいとあはれに世の人もみたてまつる。藤の御ぞにやつれ給へるにつけても、かぎりなくきよらに心ぐるしげなり。こぞことしとうちつゞき、かゝることを見給ふに

細 二条の大政大臣也 弘徽殿の父也 明花二条ハ大臣ノ太政大臣 仕相國 或引入左大臣 元慶四三月基経公仕相國 越左大臣源融此例也

のちのちの御わざとは 河 孝事 孝養の事なり 河 ならび 事 日本紀 論語

孝事 孝養の事なり 弥七日くの仏事なとの 孝養なとも 桐壺の御ための [illegible]

藤の御ぞ 細 河云服着喪衣物也 明本義ハ藤皮にて織る布也 御喪服に用る布を以て衣とす [illegible] 十三日着御して全服 [illegible] 麻布を用 [illegible] 仏の御服也 喪服事仁明天皇 [illegible]

可為河日

あらじ[illegible] 花 世のうき
[illegible]
後拾九日 細 河ニ七条后う
世治り後伊勢「[illegible]
あまのこ[illegible]の中に
とらく[illegible]秋の紅葉を今
いそのうちうくわれるへ
らく

此ところ記の
細 河ニ呂后為人剛毅 史記
所以[illegible]以て悪后の[illegible]
[illegible]
朱雀 漢恵帝に似たりとあり
弘徽殿大后を呂太后に
比して古り恵帝も其
性仁弱せとい[illegible]
[illegible]
[illegible]朱雀院の[illegible]

弱なりかありとこえより
花可為本記ニ 弘徽殿の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

細 [illegible]比叡也
[illegible]
[illegible]
[illegible]殊勝せ[illegible]
明河 花ハ君子の樹也

世を[illegible]
[illegible]
ど[illegible]の御[illegible] 細 [illegible]
九日 又 [illegible]女御[illegible] 細 [illegible]
[illegible]
[illegible] 細 七七日の[illegible] 細 [illegible]
[illegible]
[illegible] 弘徽殿之
[illegible]世の[illegible]
[illegible]
[illegible] 朱雀帝の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

さえまさる 細 あまりよ
うちむきうる鏡に心
のありさまをかくてかのいろかや
うみをの池の面をかゞみにて
面白し 河海 大和物語 亭子
の院にて 西蔵 池ハ枯野
しなかくの様にて影もうし
見かなさぞなかりしき
あまりわかく若うぞあるや
呼 心くわるの池の面座の
思のうへうれだあまり心
しもおかしくもどしも 若濃
の命よしむきさる表ふ
りし
としくれて 哥 をどけの義ある
され
わたらせ給 中宮三条宮より
へ行啓の儀式昔よりかはる
ハあまれとくし
御里住もなし 細 今ハ兵人のや
うかしと蒙事よ里に
そ昔時のさしむきを
あかりしかりしわかれば
あかすく

（源氏）大将の御袖いたうぬれぬ。いけのひまなう
こほれるに
（源氏）さえまさる池のかゞみのさやけきに見
なれしかげをみぬぞかなしきとおぼすまゝ
に、あまりわかくしうぞあるや 王命婦
（命婦）としくれていはゐの水もこほりとぢ
見し人かげのあせもゆくかな そのついでに
いと多かれどさのみかきつゞくべきことかは
（細 三条宮へ）わたらせ給ふぎしきかはらねどおもひなしにあは
れにて、ふるき宮はかへりてたびの心ちし給
ふにも、御さとずみたえたる年月のほど
おぼしめぐらさる
（細 源大二才 三月）
（花 天下花園）

ちりくれしろ 縣召の除
目なり國々の司などをさだむる
の除目には院にさふらひし人々
まゐりつかうまつりしかども
院の御時などはさうざうしくもいはれ
かくは後の時などは院の御
院の後は院の勢
世の中はみな一院の威勢なり
おもひやりしとく
院門のありさま 孟 二条院の
門前にも車馬 門前 冷淡 華
る 瓢 琵琶行
院の威勢 院崩後の振
かくうつりかはる
院のおほひなき時、あまり
細 院の御はなれより御内の
ことはあれなきやうにしを
関もとの人々の思ひやり
とくに惣かく盃目 呼 院の仰
思ひやり候とも

まゐりさぶらひ給へりけり。（源氏）大将殿は
ものうくてこもりゐ給へりけるのこ
ろなれど、院の御時をばさらにもいはず、
（御門）このとしごろはけぢめなくて、みかどの御うしろ
みにつかうまつり給へるに、馬車（むまくるま）もすくなく、
（細 三ケの一也）とのゐ物のふくろもをさをさ見えず、
（源の御内の家司）したしきけいしどもばかりことにいそぐことなげに
（源の人）てあるを見給ふにも、（相 連々に今よりはかくこそあらめ）今よりはかくこそ
はとおもひやられて、ものすさまじくなん。みくしげ
（尚侍）どのは二月に尚侍になり給ひぬ。（細 朧月夜之御匣）院の
（朧月夜の事也）御思ひにやがてあまになり給へるかはり
なりけり。やむごとなくもてなして、人がらもいと

后ハ里がちに　細　弘徽殿の
大后ハ大臣の里がちにおはし
まします。参り給ふ時の御局に
ハ梅壺を用給ひて、さうらひて
に弘徽殿にハ尚侍の君を
住給ふ
とうくわでん　細　登花殿ハ
弘徽殿よりも奥也。むもれこと
れたる所也。花宴の後
に埋もれたりしと也
此御方にうつられての方也。
河　登花殿　貞観殿　梅壺也
登花殿以上后町の西殿也　弄　朧月夜
御方等曹司也
の登花殿におはせしが、弘
徽殿へうつり給てはれや
かなる也。登花殿ハ弘徽
殿の北にあれバ、むもれたる
といへり。梅壺ハ凝花殿
の西にあり。何もちかき
殿舎也　見花宴
とのゐ　細　今ハ大后おはし　の事のごとし
院のおはし　細　朱雀院ハ院の御
門の御心にかなひ給しを
后の事をさへおぼしよりて
おもひておはしますを
ひかへ
よりつめたる　細　御いきどほり
みせ給ひしむくいをとげ
むとなり
みしりたまはぬ　細
いとはしめてかゝる憂世
のうさとなり

こ姫君を　細　葵上を大臣殿
より御方に引よせ給ひて
とかく源氏に宛給ひし
也　弄同
おとゞの御中もとより　細　左大臣と葵
そばそばしく
上父と右大臣弘徽殿の父
との中よからず。いはむこともなく
(河海に)
はさみ文選(そばそばしく) 文選ニ云
是ハ文選西都賦ニ

よくおはすれバ、（主位の人々）あまたまいりあつまり給
中にも、（朧月夜の事）すぐれて時めき給ふ。（悪后之）后ハさとがちに
おはしまいて、まいり給ふ時の御つぼねにはむめ
つぼをしたれバ、こきでんにハ（尚侍の君）かんの君すみ
給ふ。とうくわでんのむもれたりつるに、はれ
ばれしうなりて、女房なども数しらずつどひ
まいりて、いまめかしうはなやぎ給へど、（細　源の御事）
ろの（通のさく　弄孟同）うちは、おもひのほかなりしことども
わすれがたくなげき給ふ。（源と朧月夜の文かよはし給ふ）いとしのびて
かよはし給ふことは、なほおなじさまなる
べし。（細　源の御心）ものゝきこえもあらバいかならんと
おぼしながら、（源の御くせ）れいの御くせなれバ、
いましも御心ざしまさるべか

めり。院のおはしまいつる世こそはゞかり給つれ、（師逸早急なる后の御心）
后の御心いちはやくて、（悪后之）かたがたおぼし
つめたることどものむくひせんとおぼす
べかめり。（源の年ごろにくみ給しことども）ことにふれて、はしたなきことのみ
いでくれバ、（源氏）かゝるべきこととはおぼししかど、み
しり給はぬ世のうさに、たちまふべくも
おぼされず。（細　葵上の父）左の大臣もすさまじき心ち
し給て、ことにうちにもまいり給はず。（時めき給ひし人）故
姫君を（葵上之）ひきよきて、（源氏之）この大将の君に
きこえつけ給し御心を、后は（悪后之）おぼしおき
てよろしうも思ひきこえ給はず。（地）おとゞの御中
も、もとよりそばそばしうおはするに、故院の御

而棲金爵とあり殿閣の角を云也ん八御かうへまうる花晴 鯱鉄こうへしむしとそこびらかつ
くりこゝうるくらばくしさまあるをおやまれり
たれへのかりしにかへるを
おほ八左大臣のうちへ一はと
さうしくこまかく

せよんげうまじ左大臣のまくらがし とおうかりてしぞ へ今案
たゞかれよ姫もの親権也 する紙おらぐさむ左大臣ん有くしと
おぼしうるもことつりかりて大将ハあはれ
よろしくわてりくよひまてぞあらしひ お葵せ宮く とき
しんぞと中くよ三徳くよわがれしをあそこ 葵のうせ世の時よりハうかりて
わらびをとりつきさえひらてしまへるを 夕霧之
くちみられハおもひれぬよありがたけれ
とりてくいでも給ふぐしてぞもいた 左大臣も源氏をうらみつる
じさ後ゝかうくうぢきあはれしのおこし 源氏
まりのきはじめていへ御ありけるみ
えあしとがへのひし一形くしじ 母ひあうきさのあやくし

きうかたさ御葉てしの
細故院の御世ハかけ仕し給
ろうしもしげく又らきぐに
湯ろくありしを今ハまゝも
侍しさうしも思ふ事
なるにや 晴 源を流のお
かし先く時のうせ也 無量
しくよてて 給
おいせのさかのかくかきうぢ
まつしてこうさいひあやる

よくも給ふもあうりぐくしさ御まのし
おりささもおいあらすかほしかりてこそふ
し給ひねざいとのどやか給ふいはしまお 無源の給ふ
まほしさ御あたる後ゝかちゅしのさいのび
めでのはさいらいそさ世の人もめでて 葉とも
まかざるもん志れどこあるまくしのはいかの 仏よ葉の愛を 御のの綱
りちさしくうてもちらみくも苦に 岳々にくへ
乃あまもひさ
よやくしうくう給ふむひかぐくのうさんなくと 葉の宮と
めぼさはなうかくしうをえあくなまくなさ
げんちうとめはしくてまてはくのかにうさん
やもうくく便めほうえくし物絡 葉とつなたさりにうめくし沿ひ
よいらりいぐくらくやうしかくらはありさゆ

むみくも おあかひの宮
のあまよれ御衣裳のまゝある
ぐしとみくしらいつそ
まれ宮紅葉のまゝありて
ころ後よ葉の又衣へ対面
しまへるだらへし
ひうひくく 晴 南殿や
師 南殿の露壱の泉庭
ハ葉のやうかける事ハ一人
もるさこし 細 故人の
衣のとりかいやもとられ
思給し 明 秘云葉とよの
殿よ対しくむいひ殿と
がうとのいかかるへし 他殿
こ河云 南殿のかたさ
物絡よ細 古きの物絡よ見ル
さ南なり 晴 大方なる云り

又位居西洛寄まして南殿
とせらしゐうまて
斎院ハ御かくらまて 細 院の崩
御よりてなり葵上に
后服の女三宮の斎宮とを
し斎院のゝまし 明 桐壺
帝第三皇女之
あさかほの姫君に何よ
見給 一説 槿の斎院も桐壺帝
の御おのこそれハ将服を
うくる七日の服三日のいとま
申されハ秘らくもおく日数
とゐへきなし 孟日
うきのいつもはやハそわう
河 孫王為斎院下 真子女王
文徳御子中務卿雅彦親王女 仁和五年上定
孫王例 此一度歟 愚案
花鳥 穆子女王孫王斎院
の例とおもてり 帝王系図
を考るに穆子ハ光孝天皇
の内親王にて斎院となり
まゐるしたへり 花鳥の
説ハ誤なり 細 花鳥

なり。斎院もれかくうまて おりりお給ふしうが
あさう屋のひめ君とうけりよ井給ふさう
をのいりきみは。そわくのねさうふれいかや
らもあらざりされどさうへこ女みそやハ
せざりきんだねの気色し月かれどかれ
ろいかれ給さかりつゝとうぶるすらごとふ
かり給めれいからかしとかはれて。中ねよとく
つま給てとも此わびごとこそれがおもしは
しくぎるべしむりよるるれあり滝にど
とにゐよるふとも此帰しくれるやう乃
ちうるめしとりそはまさるこしかうき

岩 無品内親王者依世次簡定 諸王女卜定之 花 此物語の習 延喜已往 事例 孫王の斎院よあきらかなり 穆子女王 真子女王の外ハ理乃例かさかずありき

いとのうつ書をせり孫王の斎院よあきらか
ときく
ちうすもちごとよ
中将のおもふれ
みそじい院の御わへえ
こゝ不見さきてうりて斎の中れまつう
かりそいいけりまさようし世承年此い大経
つうくまよおりすかせいは下ハこえうるきこそ郷
史記ニ云孝恵為人仁弱なり
細 斎院よ御給く 孟 斎宮よ主また八神事を嫌ふこと
細 斎院のつひきよ女房く 所 あさかほの宮乃女房
細 源氏の御ことをきうりすかりのくこ御心やすしかうき

は院の此遊こゑとまて。おもくれよ此倍かれ
どやうゆくしけすうちふも。れんなすらび
ようるよをふきて。つきさ所此らし世まうね
ゆゐべし。母ききれかはさ地ぐどうぐくよ
とはいへそむきこあうかど。代のまうこ
これくりようるのそねやうかうがうしう
さのそまされど。うんの気いいへあれぬれらて

細 さはらくとうりく
細 弘徽殿の女あ故大臣よ
此給とちえてうう一本紫
ひとあり用るべく

あさんのみちわく
河五壇御修法 降三世
軍荼利 大威徳 金剛
夜叉 中央不動
称名院注にいはく五壇中にそ
行なへ不動中にありて
五大明王法を修らいふ
めしさる 一明中壇阿闍梨
御奉く
中納言のまへ 細 朧月夜の
女房源の君とうちまるく
どりかたらうことへいてあひ
孟賢ハ母もくしきうことへかたきを
之師 弘徽殿に朧月夜のかよひし
ノ又はそのそて帝の寵ある
女なる程源氏をもひきつらん
所に源氏も人々に手をせと見
給よ次戸のうちまちなる
帝木の書よりかしら見え
うこいさめてすきさいなら
ん女よんとうせあやなちら
まそえん人のうめくなるく
る名をもそつべきなとひま

ろざしのほどへはあくてもなほつゝましく
孟漢ハとかくみちさし おそろ密通ありし之
いかなくべくちしんのこじめきて
細弘徽殿の源の君をかへ
刂しこおそしける帰らせて。例
朱雀の之
のさうのそうよりこそ給ふの首ひけしくる
朧月夜よ人のうへよ 細弘徽殿のさしよの之
浄そとのつけのよ。中納言の君まぎらく
源氏
ゆていれしそまちしらん人めこそたげさに
なれハつくりをもしげうなると 中納言の君
尚侍の君也
うう美ゆ。源氏をそまちひとさいよ。
あねけさ給ふれべきしてめでうきをど
朧月夜のさのおとく
よのまあがれといへいそうへむろうあく
ん。女のけさ給もげかぞめでたしとされさう
なら浄ちくちらそハいとなにしくやかし

うちよしまよあり
まう人ね 花 西文大将義云
宿申ノ事大将以下サ将以
上宿候之中至其上臈职
由見ス殿上及宿 若大将候
御前ニ給次将殿上人申宿
申ノ宿人候由即大将於テ
弓場殿及便宜ニ 令申作
五与奪初問ニ分著申也
与之其音徹也
加山羽林おなし宿申ノ亥子
時左陣毎魁夜行丑寅
刻右陣勤之丑刻物節
一人申宿申候由殿上及宿
所尋上
鶴次将在 今業宿申の光寅
所ノ申之
にそし夜大将次将の内侍と
のあそさう上よりの人の不と
あそゆ也殿上にても又直
戸みくもゆ也大将御前
に祇候の時も先申おねし
てゆせんあね出迎てとそ
とめへばた寅の宿人宿
姓名などゆと大将なとらん
ちよりしと保そうの帳の

わ浄めさわりべきうちしてみゆかし
きけれそひかりて浄どうくおけゆくうや
何と彦の君のひく
とおばゆるよとうなるよれもとのあゆさ
わらかとはづくまかりがきいみのあり
みうへさまこの五所かさぞめんべきうつう
まうさまう人のぞしへおこすれてうかと
源氏の
たのいまさいのうしむつ見へゝ
寅の一刻之
源氏ハ
宿直司と宿東人
あるくて名をうるそそ
ひと刂口ゆ
朧月夜
かりんいふ女王ハ
むらしるさく袖をぬそえてをれはんとを
しみつ意なのけくまいとの給ふ浄。そうまぎ
ちそつしかう
四と館に云つけて之
朧月の君の之

字ゆゑをとりみるく中かねもこれよ同しと此物語よいへるハ今来つきのうへにうつりかへれかおうあ
すらん今これともるやの事人をとりへら隠そそのうへらみちくこハつくるくとき中将ここく侍
るそこの所よわつくりきとハうそり寅一ハたんさの宿直ヤしくこの時源氏と頭中将なれ
ぞさくぎうしききも也又云近侍よ告べきさるうなりと近来日のみくねむり儀人の源氏
のくれゐ給へるうまあんとそそくへとしくきこむるやと源の字ゆひ給く源の字き
いうらわつるうわれ代言やうしきと 譬曰 抄 是ハ物うろうれ得とところへ
まうこ此ようりまうくくろうこの為ぞうそそあるへき
るやうまえ云ハ源の好よ此そうりよ近来日のうれてあるかなるへしとまう釈して云こ
師 此物の説ハ古紙の作者字して云ところ 細 此歌字中ハ大将ゆえくいなくて近来日
の人乃何なるうへしをくくこうすハ常日なうりの歌おうくくこめうくさも
かれてもまゐ人き地と世骨やうるやく源のこく給し又ハ源の歌もくま来の大将なり
それよ歌身のうくまあくと知くのべ字歌うくむかしされも歌あしく時をや也 師 此細に
なえよの事の主と云ふて源氏の此かうならとこあり
ちくきうこなうろくのとしへゆくもちそうし 抄 別人の近来日と歌そうくうまと源く
今為ねうそゆくまれハなうまきのひつゆくまうまとこあうはらんと人のきしへむつしこ
芸うやとくよううくを見くうくきうこと日本紀よ黒心と書てころうまきんとよ
めり 譬一猿人のむしきく
んうく 細 此く寅一と吉作るまうそあくるとと云うきと一廠をせ
てまのぞそくうく袖とぬもしてなめう
なげきろく 細 むえのあ開
と人よあくるうきことと 歎
侍らら秋とくくていへる川
ましさし也 譬日 師 此の
まことろく
源の女
かげきつわ身そうくてまぐせとや
しねのあくべきうそとなるすくく
別のさ歯し
薫香殿 細 此今上重の女
御今上の御母也 明 又右
御んの考は右大臣とうく
うらひ所望なとの又也
歌の中ね 細 ひけ息の事也
以中ね歌かね夜のかねを
待くの思本え 抄 此の字
此時ハ中ね来てもかねうそ
とゆかりれし夜の字此付え
夜かねえのく字いうんうれ
月のまこくまわり
所くまある志ててのりし六
まさうらもうきんく
ゆくさ字ゆう 以中ね云流
あくく源のまとうやくくそ
しまあへしくく 抄 名やう
のうやうくせまうなへ
しとまつうなうしこれら
やうく此にのきをくべ
き序し
りそるうれ
細 夜まの話る也秋よつ進
ぞくましますあはとろ
づくるのびさるらもな
てつぐまひぬ秋ふうさあくりさ 同秋のえ
いそずきりわされうよ いとへうやつれて 源の独し
ゆうまひつまつしきも ゆるりのるうされき
様あく薫香殿のほとりよの 歌中ねかぎ
つぎうちそて月のまうしく有あさ そぞと 立節
このうまそうそうなる忍しそもまず給 源の之言葉 曲
ゑんそいとかしきれげくさ字ゆうやうこと
あうまんしぢうのことよつけてをかそそ 源氏そく
されつまるきへのけんをいいぞでまうしそれ
りひまそて給まのうし秋こうのひくうさ 花夜つなを言う字れつれるさん
まそハす代つふんしと歩かして給ゐら 細 夜つかのさへ源よハ秋そ
うり酒よまうり給をんつしいうゐくしく

ことに也恋心のまことのま
しらへかくしきれを
立作人こと也　孟　鶯月夜の事
ゆへこゝろけられたる詞に哀
森の貞心なる事を感し
まことに間断無尽にて不ハ光
いさゝかも々しきと
細　古注ハ詞よ源の心をあらはす
あらはさるゝなり香宮
の事よ此心のある也とあり
孟　数説源との番通を語
一世よあらはさるゝ事
なり

そのうへとくおぼしなりて、まことに
まことにたえぬと、おぼつかなくおぼしたる
又よのつねの人をおもしろくねんごろにこの
ためのあはれとぞ心よりよそのこゝろ
よ、かゝるこのみくさにこゝろのやまぬ
もとハ胸をつぶしたまへ、いさゝかも
文をおもんじたまひてなりぬ
よいとおそろしきよ、いまさらに
とのこしめして、親子へさらにのみ
文のかへりよ、こゝろよりぬこと
きたんとおぼすよ、いとおそろしけれ
のりとさせて、さしもやさしく

まれんハとあるを　孟曰
何伊勢物語此男いとま
をんわずかにやめたへ
と仰けれどもかれし
やまさらのみつよりして

まうしと、おぼしいひつゝねとなくの
かれすぢいひおもひよらぬあやしきさま
さましうちそへちからつきまうりける
ろおほくうはり給れんことの文
すり侍れば、夢のやうにおぼえまつる
まつるべきやうもなくてこれくるし
まへど、文いとこゝろすくなくて
まそだてはれむすめをいとおしやみ給
へだちくうきひつの、命婦
あさましうてこそまんかあるに
はかなくもおもひかさし給へしとこそ
すまゐにさしてゆくさきのさらに

若のはかなし、わびしき
こと源の句を仰し
まて

うつくしうせよかれハ孟源の本心
もうせさうな 何ハ好色の人ゆへ
ゆつしもそ人めよわまり多
どうかるまして八おもしと云
ふも浅よをもまよおもつくに
なりて八つく手せを忘れ本
んなも先よ思ひあれハ凶てさ
とり世の中さの議めく
まれかもあくそめりこめよ
まれかもあくそハ源の術之ぬ
まこめ 塗籠 秣名乃浪籠ぬ
まこめハ帳臺のやうなものをを
くかく文庫などのやうなる所之
無アマ文文 細夜叢の見違
文文ハ中文文文之 唯 文の大
まハ中文文文之 何 細ゆ殺ハ
無アマのこやしきま之あり
唯ゆ殺ハ無アマとよろこき
子なり 細を可男氏

ちちくらいしんをうるまかれバおのけて
てよかれどいぞ結ちどそかちぬ。かれるや
くるよゆぐるさて、んぐちうつまうりて
志げうけずへば。うれふをあしぞぬらりご
めよやしつれ。迷そておいつそ。かれぞどうとも
くしゆうる人のうろかどよいとむけ
しいなハりのをいとまびしと地ぼしを
るよ御乳あがりて。かくとうやまおしう
をきせ結。無アマ文文やすどもまりて。
侍めせちどさはく紙だねいとまびし
うまく地をすりうしてくれゆく
ゆどうぞ、ゆうりのへるうしこりゆ

人々もまさいれうろ
夜叢の女房を迷源のく
てましかれども夜へア
さくるし名源の見まお
なそと夜叢のさうしめ
さハ御迷惑よ思ひかを
へられハなり

くうりゐまひつかん
細源のうく家よこうり
おりしまゝすとへ夜つる
知源ハさうしせ題日

結つるんとは地ぼしをくげむらんくくと
まさいれうろ海どはさじとてうくかずんと
とかさぬなからべし。ひるのおおしよいざり
いぞくおりしまずうろしうゆがさうくる
ありとそてやをまでぞ結ながして。地まる
へひとむつくるよなからぬ。れいをけちくる
らさせ結人もくるかれバ。こつしこれりよ
うさつなどしまぞきへうふ。合図のまるな
どへいきよしてうりて。いづしきそまん
んごまひさんれけあがら世結らんいとおし
うかじらちさしめさおかうへさきこいめら
ごあのやの。あそめよおさころをやどく

世やつきぬらん
細 我世やはてぬらんと也
あはれなる宮の御けしき也
或ハ世やつきぬらん何や
さぬらん 樹下集
かの寺不及引二

とあけて御屏風のはざまに伝ひ
いり給ぬ。めづらしくうれしきにも涙を
おちて見たてまつり給ふ。なほいとくるし
うこそあれ。世やつきぬらんとて、との
かたを見いだし給へるかたはらめいひしら
ずなまめかしう見ゆ。御くだものをだに
とてまゐりすゑたり。はこのふたなどにも
なつかしきさまにてあれど見いれ給はず。
世の中をいたうおぼしなやめるけしきにて
のどかにながめいり給へる、いみじう
らうたげなり。かんざし、かしらつき、御ぐし
のかゝりたるさま、かぎりなきにほはし

としごろすこし思ひわすれ給へり
つるを
源の心也。紫の上はよくにかよひ
て宮の事をもしばしは思ひ
わすれかはりしに今又よく
く紫の上と中宮は似給へる
を見て源の御心にも思ひ出
給ふ物思ひのはるけ所
御紫上とふた所を見給ての

さなど。たゞかのたいの姫君にたがふと
ころなし。年ごろすこし思ひわすれ給へ
りつるを、あさましきまでおぼえ給へる
かなと見給ふまゝに、すこし物思ひのはるけ
どころある心地し給ふ。けだかうはづかし
げなるさまなども、さらにこと人とも思
ひわきがたきを、なほかぎりなく昔より思
ひしめきこえてし心のおもひなしにや、さま
ことに、いみじうねびまさり給ひにけるか
なと、たぐひなくおぼえ給ふに、心まどひし
て、やをら御帳のうちにかゝづらひ入
て、御ぞのつまをひきならし給ふ

こゝよむきえつし
右つかの君むきぶよえさ
さくりしたら

ところよあらきゆかしの
君もらう汉右の御姿
源の川まふ御衣よころを
へてひろれらうし
いとんうくもくせの
おえのびれあるねとえ。
されどしば右文字ハな
うりしし

源氏も平生の
わきうしろひ君るさ右之
こころいれいましめのるあ
見へし

あらくさしもひこよ。わざとましうもくつ
けう御ぶ名されて。やがてえれゆりあへりつ
どるむき思へりしところやまはう流
らくて。ゐさ。せめてるよ。げぞたぞべし
はそてねさらのき給まへてろみなあろ
ぞおびしのとちそへられらわればいと
ゆうくもくをの御ど哉げしえられていを
じと数しろ。ゆるとをこちら世とりそ
志川めかふゆこそろされそれてらん
ぶ海かもあれば。ほろ川のことをかく
うしろ嬉しあへど。もとよんつゞきると
堂して。他のへとまてしあわずじらから

さすらよ　細源の御の心
もうよ右つかの心年より
とをろうもまし御なり
下云京の御ふせうとも
血承之のとうろとのるり
かりへし
おゝまりしそはは
御一名の寄進ハかしあり
おまをハ思えさり是又
貞んたりへし
ろ川しる細うり
右盡御ろりきさつる人へ
乏あひゐのびしうしく言
われまつし
とめそ志こぐひ
右盡式云のれまの細と
志みてま些うてきうハさ
さんを帥さんあれハ實
すくてろうりまつし
くうつろりみなく
御生より右盡のつまでく
北うしま源よ源の言さり
ひて文ろ見しうろ細く
ゐうるてならりともおく

のいとおやまし御心ばへりもあり
だ嬉しくえんとのつまへとつきをぬれて
ろの御ど哉ひひつけ給。まずりよつるど
とる給ゆしをおしみおんおくゝみし
こゝまはわくねど。おしくてあていと口惜
う御さるんばろ川しき細うぃいうとよ
うの給のれてこゝひとをあけゆくとあ
てあさうひこそしさうんへもうてびるく
ゐちけしき流けらひたくればくくうら
まそもとろくいうじきられへ右うさよへ
あけ給あくくいかよ式御けるゝき心を
何とおもしあゆめこそしまへし。ゐすのめ

此歌あるハこれへも忘ましとかくらそけなるを世ある人ハこのこゝろとゐかれとこそゐかして詠
かくハなくハ油断きしたのかなり
あすゝの　哢　源氏のやうて
とせ作りんんと宣し詞よ
ゆくさまあつり　孟同
抄出此説又ハ此世ころく
ねつこしきり作め人さ
とあり詞の末かれハ生く
世しよりうのかうまき
らハいつまでも　輪廻
ちんとまみきつり　師説
後の心ハ蓮台にあらす今
日迄ほさくれハ此世ひよ
やかてう世も入りあはる
の物ハまつきつ後世ま
てもかくハ今ま世の彼
はれかうう死うつり身に
くへさそとのへ
細源の詞也そて世にき
んともの紅をいそくあり
こもあすきハらくおうハいろ
まそしみへき、猶身と繋き
しうやし花昌　細　みかのりさ

なかくこそなかやく／なかゝなかりくひハおくれ
なかくこともとなかるとそして　くひるけ
なりあけくれバ　かきりなく　いとうしき
細　春海と弁へ之　花哢同
ことを忘め　定ハかくは　やうなるを
若つハ死ぬとへうり迷ひと執わとく
此事きのかうしあれバ世中ニ捨りと
源の心よし
細　源の詞く
さうしめされんをいとこちうしれハやら
てうを作るんもこの世なりおつきらな
まを作めべきことしもほしるを思くつけ
さまでかもり　いゆり
源哥　哥説あり
めふきのかこそなかまりくんもほま
源詞
りくわかきかつへんにほかうしかもしく

らハやとハらぬまゝ命のかきりとそ　師　此地蔵ともの心そ源の身の上てなひはうせき
の人しかり　命あらんへても又うかむあすゝのかきりなるハいつまでもなりんへて抑も心へき
身そそとし此意ハ我脩の義　源氏此世なる程思ハひ以源其詞にのミこと　およそ心へ
うきゝくいとうりあり
此かつしある　孟　源のうくうちかすハ以うらへしくん　師　来世にても源の蓮台とやいふる
生をして後ハ来世のさきうりしとあらんとあるへく
なかき世の　細　今よとハ蔵つ
今の身ハ源氏の根とのとし
てさ世ふさおてとハ源の
事うくあへきゝ也　哢孟同
作此部一みとそくと以
ちからあての世との人ゝ蓮
まそうらことのそしつことも
うす紫源の心ゆへそ源の心
とあうしるそ我を根あそくた
いと悦しと喜あるかつり
孟　源の眼立よて夜の契
しあらへきなそてと云詔
かそ文にもあつしせさ
せつぬ之

そしきてましハさりげなくうかけさる
あなうくの老之
かんく
あなうき世のかきりれんかのかくもうけハ
あなうくの老
ものとあらくとそしおんくいひなとせる
お詞なくしといふる心あり（おもハさるへし）
源のうへ
あるさ雨のいかうしかきさむちいらとの
御ほそんおとかけなあとのくきまれはまれ
何と雨同かつく
かもあらていくへの山いつとぞ柿りそしまうれ
あまし
うるとそしてそまりしもいちしと奴へ
しそうらんくとゆかしてけかくまきさし

なぞや世にふれは
細 世にふれはうさこそまされみよしのゝ岩のかけみちふみならしてん 花の外
桜名源氏の君のさまによせ 桐壺
のまさりのもとにいひて
花のさかりにみし世を
のこさんとおもふ也 又此所
の上のことを給ふ 御心を
つけり

又もその名残 細 春宮の御
ためにおぼしやりのなし給
なるべし

御心おき給ふこと
孟 源の心を給ふ也
弄 源の御ありさまぬ

給はず。うちたえて、うち春宮にもまゐり
給はず。こもりおはして、おきふし、いみじかりけ
る人の御心かなと、人わろくこひしうかな
しきに、心たましひもうせにけるにや、なや
ましうさへおぼさる。もの心ぼそく、なぞや世
にふれば、うさこそまされと、おぼしたつには、
この女宮の、いとらうたげにて、あはれにうち
たのみきこえ給へるを、ふりすてんこと、いとかたし。
宮もその名残、例にもおはしまさず。
かうことさらめきてこもりゐ、おとづれ給はぬを、命婦
などはいとほしがりきこゆ。宮も、春宮の御
ためをおぼすには、御心おき給はんこと、いとほ

うつくしくしもは
大后のあるまじき事の
みたまふをもいとゞ心う
くおもひ給ふ名もたちなん事
をおもひ給ふにつけても
大后のあるまじきことゝは
細 中宮の位を去ことを
后になし給ふ事を大后のいた
く中宮の位を去給はんと
なさしめ給へと大后の
おぼしめすにも
ゝかくてこそ恐怖ある也
孟 中宮を辞退せさせんと
おもひ給ふ
院のおぼしのたまはせし
細 院の御ことをおぼしいでゝ
中宮をもそむきて
しのびたまふさまをおもひ
てもこの世の無常をおもへり
戚夫人のことなど 細 かやうに
はかなきことは河海に見え
たり 高祖の寵愛の
人にて戚夫人のことなり

おしく、世をあぢきなきものにおもひなり
給はゞ、ひたみちにおぼしたつこともや、と（遁世もやおぼしたゝんと）
さすがにくるしうおぼさるべし。かゝること
たえずは、いとゞしき世に、うき名さへもり
いでなん。大后の、あるまじきことにのたま
ふなる位をもさりなんと、やうやう
おぼしなる。院のおぼしのたまはせしさまの、
なのめならざりしをおぼしいづるにも、よろ
づのこと、ありしにもあらず、かはりゆく
世にこそあめれ。戚夫人のみけむめのやう
にあらずとも、かならず人わらへなる
ことはありぬべき身にこそあめれなど、

孟 史記曰 呂后本紀 太后遂斷戚夫人手足去眼煇耳飲瘖藥使居廁中命曰人彘 河海には呂后 戚夫人ヲ 有罪六本歟 戚夫人ハ漢高祖ノ妾趙王如意ノ母也 惠帝ノ太子にそおはしゝとも 位をつぎ給ふ後 母の呂太后の[illegible]ひせんとて 戚夫人の眼をぬき人彘となして 廁におとしこめてとなん 見史記にあり 明 此後恵帝史記にも 崔ハ呂太后 恵帝は[illegible]

おほつその比婆のうへ
らぬ時 いまひとつ[illegible]
[illegible]

中宮の御祭[illegible]

うしろめたく[illegible]
ひきうつ[illegible]
つゝてはとう[illegible]
[illegible]

三月の ついたちころ 孟 女房達宮居

中宮の御心[illegible]

御屋[illegible]

[illegible]

式部のやうにや　細　式部とて
よしある人の尼になりし
噺　式部とて老たる女のある
をそれがやうに尼になるかと
きゝて東宮のおほせらるゝなり
御心をさなくましませ
ば、たゞそのかたちのかはるといふ
尼のさまと思しめすにて
式部は年のよりたるとおぼし
てのたまふ
いふかひなくあはれにて　細　何の心もなう
まだ御をさなき御心のあはれ也　中宮
やう/\しくうちなきての給ふ
かみはそれよりもみじかくて
花　式部などいひける女房
など髪みじかくそりける
へしそれよりもみじかくとは
いふ尼のさまを見するにや
よゐのそう　河　夜居僧
内裏の二間にさぶらひて
君をまもりたてまつる僧

て侍らば。いかゞおぼさるべきときこえ給へば御かほ
うちまもりて。式部がやう
にや。いかでかさはなり給はんとゑみて
のたまふ。いふかひなくあはれにて。それはおいて侍れば
みにくきぞ。さはあらで。かみはそれ
よりもみじかくて。くろききぬなどきせて
よゐの僧のやうになり侍らんとすれば
見たてまつらんこともいとゞひさしかるべきぞとて
なき給へば。まめだちて。ひさしう
おはせぬはこひしき物をとて。なみだのおつれば
はづかしとおぼして。さすがにそむき給へる。御
ぐしはゆら/\ときよらにて。まみのなつかし

げに匂ひ給へるさま。おとなび給ふまゝにたゞか
の御かほをぬぎすべ給へり。御歯のすこし
くちて。くちのうちくろみて。ゑみ給へる
かほりうつくしきは。女にて見たてまつらま
ほしうきよらなり。いとかうしもおぼえ給へ
るこそ心うけれと。玉のきずにおぼさるゝも
世のわづらはしさの。そらおそろしうおぼえ
給ふなりけり。大将の君は。宮をいとこひしう
思ひきこえ給へど。あさましき御心のほどを。時
々は思ひしるさまにも見せたてまつらんと念
じつゝすぐし給ふに。人わるくつれ/\に
おぼさるれば。秋の野も見給ひがてら雲林

玉のきずに　細　源によく似給ふ
まもるをきずあり給ふ也
白圭之玷尚可磨也　毛詩
斯玷不可為ト云

雲林院　細　河海　序ニ淳
和ノ離宮也。紫式部ガ墓、
雲林院白毫院南小野ニ

笠之墓ハ西也。宇治ノ宰
蔵日記にも、紫野に
雲林院わたりしみさゝらんと
ゝく、紅葉をもて西白キ所
あるへし。僧人のもとにそ
立よらせのもとによのひら
あるく紅葉ちりあり
あと遍照の後なるそ

「秋の歌の」こゝまめきさら
秋の野によるまめきさそ
るきさるへしあるへら
う花もひらききなら

「うき人こそ」　孟　拳とを
しほきの月ゆれそうか
人こそしるらん夜の
うを云ひまふなから　元細
引哥同

院よまうでまつり。故あれは悲所の法を
うけの律師のこゝろあへる跡あく法文
かたしき、とゝるひとんと申して二三日
ありしよあそられるへしと物語り。紅葉ホ
のやうく気つきさりて秋のゆくいと
たゞ風めきてさかたしき給つくろさを
もとれめく物語り。法師たるのさん
あつらざりめしいそく。論義あきせそさとし
めま世給。所ゝしよ。いとし世中のつねなき
と物あしてとも、ある代のき人をそと
物語しかるに、とおしゆけてこの月八新は。侍う
しづかのおりしそまりしてかうく

うつらうくの花ちらきうのかたに紅葉あるかなし
おりちしこゝろをちらるされど。此ことの
いとるはい此世もつれくなる。彼の世
ならさよりけするりさもわらさなすゆ
身をもそなやむるかなしき、覚てつけ給。
律師のいとうとさておゝく。念仏氣
生撰不捨とうらのべてとゝるひあへ
るか。いとうしや。あもれどさむや、と物
しなうまつり、恩のわるうきそてかりひ
いそくれ給そいとしまろうちれにうろわたるや。
まいするぬ日らきとも、物語つゝくのされ
かさられは、みえそろうそ云けうされ

さもかはきなき
彼のらくこゝろのさ彼乃
此世をつ遠くきもれ後の
世よのりきとこあてわ
り身のわらきなきをやは
く。叔念あるつく
念仏衆生摂取不捨
同　観無量寿経の文也

こゝろのまゝに　細 種従せ
孟 白のゝ字従具列なり
あさぢふの　細 すむところ
寺ふかく西院に上東門院より寺の
上東門院へまゐり給ふ源のぢゞんよりさを
あはれにせられ孟創号
らなるゆかしきぬそ御ら
かはしつる月上東門院
中まとや付給へり
ゆかしあさぢふの露のやどり
よ君を置てちりをかね
ろしそうらしき孟一条
院かよふかく秘名院にて
寺のちかくへ世中ちかく
しくらすを四方の嵐
とかく源とりしれぬ

ゆきはなれぬべしやと心み侍る道
なれどつれづれもなぐさめがたう心ぼそ
さまさりてなん聞さしたる事
ありてやすらひ侍るほどいかになどみち
のくにがみにうちとけ書給へるさへぞめ
でたき
源氏
あさぢふの露のやどりに君をおきて四
方のあらしぞしづ心なきなどこまやか
なるに女君もうちなき給ひぬ御返しろき
しきしに
紫上
風ふけばまづぞみだるゝ色かはるあさ
ぢが露にかゝるさゝがにとのみありて

人のゆかりさし　細 女君の
風ふかば　細 浅茅が末にかゝれ
さゝがにをあはれ
細 秘名院にて
の嵐ともいふ世上
のあはれにかゝる
河のほとり源の
のかくの浅茅
の事とも浅茅
やうにて風よりも
さそ
候ふうち風も近き
斎院みちと　細 種斎院せ
雲林院へまゐり給ふ
源氏のゆかり
の雅楽より
同 同

かしうのみなりまさる物かなとひとり
ごちてうつくしとほゝゑみ給ふつねにかき
かはし給へばわが御手にいとよくにて
いますこしなまめかしう女しき所かきそ
へ給へりなに事につけてもけしうは
あらずおほしたてたりかしとおもほす吹
かふ風もちかきほどにて斎院にも聞
え給ひけり中将の君にかく旅の空になん
もの思ひにあくがれにけるをおぼし
るにもあらじかしなどうらみ給ひて
御まへには
源氏
かけまくはかしこけれどそのかみの秋

木綿を纔にもうと云く 師 神社の人のくつのあられハうかてやしも照かつとえうんさ
めゆかでそこきとよまこのまろり 細 斎逸波なる所よりけまつしも気あることゝぞそのうきこの秋とも
ハおもつかなまりし由又蕪巻に書信路しも秋之秋排のおゐるもハ而いつとなけまどとも
高坂かゆうの人く雅にそなうりなうずやしまあまで秋よ綴かうかうしやと云ハ斎逸
おれハうひうきうらや 孟秉曰

高坂今かて 年 けいかへの
ちつのとさまうきくうか也
高を今にもなきそうしを
うるに斎流よ之あきんさう
さうさるゝまうしつゝかふく
ろうくきれん 細 とりをを
を猫かもうるやのなく
乗ろり無毛猫子もうるや
世中をなうしえまづうの我
方と思うんぞハ斎流よ之
路ゝねさすさいうふりより
私路うるも
あれくしし茶るよ
おそのうて此秋排ゆほうを
うのおりうがなよ出さうまを
本然比在るも ちまいやゝくよ
こさうしくうんれ

そのうく 細 斎の句そのうて乃
秋排すろもしあうとどか
て俵路く 桜む しとそも
思ひよふべきゆへ何すみつ
ととことあうく俵の句よ
之なるもあれやうなれハ
とがめてくしもまうう俵
氏の法ふよ其のひのゆへハう
ぐとや
排もろしや 味 移るまのぐ
ゝうく 師 玄奔の秋排達
の極まぜの示そて法皇某
よあひのひしろく 補通
とさうぐうりてれそうしやを
そひまつく
あろしうやうの袖 細 斎来
斎先いつ重も同しやうるよ
ならしかうとしの移すり
よ保あるうれぞ移を
うろめしう思ひく宮の
袖の法花るの最め奇
明あやしうやうの袖う
あくもを一様の袖ともく
移こうめうう排ありうく

排すり母ろゆよぢすきうれ斎給いかのかとお
しひさまよりかもうひあくしりろくされん
あくやうかしなれくしげようも私もぢさ 知足林
みどりのうくよさむ糸よゆかつけなやぞ 木綿
こうろよ俵おうさを
神くしうく
くりぐししうそうすてまつうせ路れへ人ま
細 中拾の荒の花づす 師 斎流ハすきうろくとうすくつ重くおもとく
中稲ふすさうろうしくてまろしうさのとも紙
やさまへ出ふつまぐのるりにハむひやうや 俵まく
久さすうこし排備くむくれどうひあくの
うんとしそうしうりとしのそて排備りに

細 紋給うら八木綿のくるりにまをしろく
まへのそゆかのかうさうしょ
細久香 そのう、をやいぐ、ハあうしゆかぢぎすさんさ
知門高まきあん八なきさ世も八老人もあかふろう
うあく、むのぷんゆへ、うつうそ世よとるてあかられ
こゝろ てこまやかはあてゝねどうろうくしう。
細 重まく さううおどおうしかうるよなう寺して絹
細 静のまを きさを
ぐれをわびひまうりまへらんしとて〳〵煮ろ
をさうしんがさそそこしやむうれいのもそつ
もと言ふく 主通と云ふて付た
しのうやののもうれすうしょし排備し
あく、あやしうやゝのりのと移うろめ
ひざうをさうまうす
う排備さうて此ろを入くそくまてそでうし
細 元うう孝花し
まろうかう排備さぢさうもゆめへうりしょ斎ご
ろへのぢうろよむくしのそて今ハくやしう

異本 のちにさてはやりつくしとあり 花 斎宮ハ拝若聖義を云去年の九月ハ斎宮の御くだり
てまんどてし今ハ斎院の御すまひにて神をかこちて
えうすみおぼさば 孟 其よりあきおぼさばかくまつてこのやうにおもひよりて斎院に
おもりあひてきりよみかきしく思すかく 花 槿の姫君斎院にならせ給へば
てあるらよ模をかりめさハ神かみのならぬあひぬべきを今はあらじ
あひてのちにまさしくかしはぎといはあやしきことく
源とく見えくするね
細 源ハ斎院の心也 源上手
かろくしたまるや
まうしあひなきことなり
うし
細 寺にて君の子源之道
るくてとかけそむしく
時くまさるのほどあるハ
あやしきさく律をとを
喫 孟 同
六十巻といふ文 細 玄義
こそ仏しのろくしくある
とは天台の六十巻のこと
あろへいし 本書世各
玄義文句止観十巻也
釈籤疏記弘決末書各十巻
孟 本書ハ智者大師 末書ハ妙楽大師作
中右記云近日主上学六十巻給文一乗院宣命学此六十巻給例也

あかへきことり
施物あるべき所々乃
んなり
あやしの人 河 柴振人重
事ならぬ集まりいやしき様の男也 一説 皺古人也 老て
あたりもしくらへし 孟日 細只
ならいきんてし 嗽 声也 なき人
と見するへと為まく
ならさ御車 細 服者なれ
らく 花 西宮記に云 重服
公卿ハ乗黒半車 今案
諒闇の内ならぬほと源氏の
みなハ父帝のおちけり重服
よって色一縁一服なの車也
ならしき事なるべし

おぼさるべかめるも、あやしき御心なりや。院も、かくなべてならぬ御心ばへを見しりきこえ給へれば、たまさかなる御返りなどは、えしももてはなれきこえ給ふまじかめり。すこしあいなきことなりかし。六十巻といふ文よみ給ひ、おぼつかなき所々とかせなどしておはしますを、山寺にはいみじき光おこなひ出したてまつれりと、仏の御めんぼくありと、あやしの法師ばらまでよろこびあへり。しめやかにて世中をおぼしつゞくるに、かへらむこともものうかりぬべけれど、人ひとりの御事おぼしやるがほだしなれば、久しうもえおはしまさで、寺にも御誦経いかめしうせさせ給ふ。あるべきかぎり、上下の僧ども、そのわたりの山がつまで物たび、たうときことのかぎりをつくして出給ふ。見たてまつりおくるとて、このもかのもに、あやしきしはぶるひどもあつまりてゐて、涙をおとしつゝ見奉る。黒き御車のうちにて、藤の御袂にやつれ給へれば、ことに見え給はねど、ほのかなる御

こよなくまされ　とて
此贈答のけぢめさらにすくなからぬ
秋の雲に心をやりたまへるとそ
しられける　細　玉鬘巻にあ
る源氏の詞に　紫の上の
御返事はこれにまさるといへる
ぞまことに細かなる所なり
ひとりの心には源氏のおもひ
よせられて源氏御方よりの
しるしにはおもしろきとおぼえ
紫の上の心にはまことにありし
御返事にてこそあれ世の中の
とりわきおもひは御むすめぞ
しきちたまへるを源の御
ひる心の事を思ひ入たまへる
けさにも心かよはせ給ふにも
あはれとわかれたまひ又
の人のかくもとなり給へる
こゝにもまさりたてまつる
ゆかしくおぼえ
らうたげにおもふ
いかにみたまふにや　梁代
余りに此事をもてあそびて
みるべくもあらずおもひにも心
ゆるされなきやうなり

つたへて侍るなど世にすくなくさへきこゆる女君
く日比の用意にむすびきこえたまへる事にて
といふ事さへむかしより世中にいひわたしたる
色のかぎりつくし秋をあはれとしる人の御心
あはれやるかたなくいとことわりなり
らうたげなる人をてうじまつるよそほひ
紫の上は山里にまうでたまひし紅葉を
まへのよそほひどもみなかはりて
世にまかせてまかなひはるかなる
も人はおもふべくもなしよはりて
てありしよりすぐれておもはゆる
よりもいとゞあはれにおぼえて

うちしのびてたがひにかよふわざ　師
いとおもしろく山林の紅葉とまじりたるに
文のおもむきもおぼろげならずかはりて　御返
それとは見えずもあはれにこそおぼえつゝ
つゝみなく物思はしげなる日かずをそへて
ことにふれてなさけある御しつらひ紅葉
いひもてゆくにもかゝることども心をとゞめ
いとなまめかしうて御心にまかせて
けはひことにもてなされたまふにこそ
まことのことわりなるを思ひしめり
よそほしき紅の色もかはりて
御このかみの御事なども思ひ
かくれなくそれぞれの御人がら

細 源のうとのおもひて孟源ハ
こ訓の御ゆへ今は藤の花ひ
あてわかくてすこしをやうの
よせらひ給へきぬなりし
人々この中に文の御くしよ
細 末まの御事ぞかへの宿
あるうちかのかうを事を
しけ

何ゆる事しるて 細今よ
しそふえんも人入ところ
しんとそて手のうらて
哢孟日 抄 若つかのつか
聞えするれよくらさし
珠田裏めるハ八の不審え
ことくりとし
はやうくみかりき
のよまくらかと紫の文よ 細 若不
うそまかりをかくこのあ
ハ咲中の文の御うかの八

細コトノ外ニ思ヒヨリ給ハヌ事也 哢孟同
ゆくりなくかうやうにてしもあらくまぜなを
をひともあやしとうちんかのところつゝ 宿直の人
なりれ給へれど見えようちとそかうしのと 葉を離よりかくして
しのりしよりやかせなる御覧じつるこの 宿直の文の心の
りにて
とくら乙女の済しくよそれぬかきくを
源氏この御かたよし
ほらかのめつら海よすくかうかられ久
見ぞかりたうてしあるゆとしらうしくて 細 源のめし
つゞきびりしうくめしくさへて物すご 今そて源の
進は中文のとしるそなひまへ
としも心うくおもしうひきなしれども
あやしくとあとてそれと見ずてく
まそて見べきりまつりまつり内の御り 細 末雀院へ行幸
しすからなるれどものかへりく

御日 源氏の御内し給
なり

うてよあはれと 孟 朱雀と
源くの御ふえ 細 源の右
院よろしく似よふまとそ来
雀院も御かすしもそて
表よ右院の御ゆをと思
初給く
うんの君の御 ゝく 抄 勝月
表の源し冬通の事まも
とうまハどてしめいうてく
しるすみれでとあかりし
きどひうと御門のたきこ
やうかりいんと右秘たり
筆しき御らんある
孟 源のうへのきあるんみ
うあとすと御内まかお内
もあるへし

もりどめてむりし今の御物語こうしく給
細 朱雀院右院よろしく似給く
ればうと院よいとのうかくそてまうり
まそびわをとこうまあいつけろひてあ
何やくしろよ物しまなそ 孟同
つゝうそぞやうかぞ物うしをすゝうくこれ
めくれにそてまうち給えんの御君の御とえる
細 御つの御ゆく
あなきぬよ備よきつめし気色御ん
朱雀の
むうかりもあれどるようは今らしめくる
しくすくべしそあしめあらそあさけ
ことなれどもふうくくえんよかげあう御心じ
く人のめくひすりしとぞ見しうして
末く源くし
ぞあきせ給はざりけるびびの御けりのゆて
朱雀院の同の不審を源よ同くして
文の御乃かつうてしめさうてしく

さらのおりしうかつせうし
秋好のおこえ朱雀院まてち
ういて給く立てし
あそびあらしもせまかれるき
たてくる　師　朱雀の御詞く
月毎に源氏もおかしうて
あれえ出御祝あるくもあり
まりこうわくつるして奈
うりのうかかけりまさとし
の御経おゆへしとそのさ
時よりはあるあへくく
かうれ
中宮のそ乗　細　源の御詞く
中宮の去ぶより退おお
ふくさとしつうい人とせ
りやう次ゆきうくあるりおい
御経るどおかへきしうき給
あられていあかくさうさ所
こ元遊くいうしゆきさせ
おいか八御経しおんへしと
ろくより諒闇の中ふも
御しの御経るどいおりうえ
へし

とみずこえさせまうて、人とさぐくしきこえ（致仕の御方の御事）
ごうやうしもでてまうるけはひせまつひ
でよ。みの后の宮のみこたち給し日のこころぼそ（秋好の雅なる日の事なるべく）
うのめしう出はとしきどてうせまめやかには
わけをくらひとけぐのくちやのかくれすり（源氏の事なり八日くらいに給ふなり）
しかのとこれあしいでそでかた日
の院やうりくえしいでくおうしら院どわうゐ。
わそびるどしもせまかりしさ給ふのしの給ふ（朱雀院の御詞く）
ゑ中宮のと乗まして給かうたらくしひ（源氏の御詞く）（源は去宮くしてとのくしての御遣ひ）
りのしゆしん院のぐ給の名そうくとりし給
しゐ文くしろをつくすまいるたを給ふ（源ひらかまし）
ざめりみよえたるの御ゆりりいしおりうるへ

まへられ給そしてそうりし給ふ。去ぶあをいいやの（朱雀の御詞く）
のみこそうてかこの給くせ奈しらゐ。
とりわきてむぞしりのおれどこまよさし
ゆうさきこう海めもおすよことくそうはとそ（細　去文を廣くしき）（とりわきしとえよ曰し）（もとの給ふうちし）（源文つくしくとくし）（孟　句）
とりのわくしうをばおみどのりぞうとそし
らうしと物しまべかれいすくしろもろくく（細　秋御宮の御さうてもうくへこと給く）
しうくぬ。あおりしの出りそとこうますへと
のつ海をもれば母宮さし給わざかけしいゆく（細　源の御詞く　師　源去宮の君よあうりてのうす）
さくかとるびささ海よりのしまへときの（かほるのさうしやうにてまし）
いひしうさかれんとその御わりさ海（源去宮の人も去りつく）（去文のさ給く）
かどしそくりしまてせんでまうしなみの衛門督（細　大去は弘徽殿）
うとの衛大納言の弁なと（弘徽殿の兄男之子）（弘徽殿の男之子）

白虹日をつらぬけり
細 史記并漢書ノ鄒陽傳の上書の詞也文選にも載たり家の人ハ源の今の身上あしきことを思ひ立給と思ひよそへて朗詠へ給ひしやとみてなし也
醫案史記八十三前漢書五十一鄒陽傳に陽梁孝王に客となりて居けるが孝王の臣羊勝公孫詭らこと〴〵く陽を讒しとり孝王怒て陽を獄に下れ陽從獄中我身の讒にあひけることを上書せし其文の中に云昔者荊軻慕燕丹之義白虹貫日太子畏之云々文選第九載此文於獄中上書自明一首云々是ハ列士傳に燕の太子丹が秦の始皇をうたんとて荊軻をたのみし時白虹の日を貫て徴を

よにあひはなやかなるわか人にて思ふこと

麗景殿右女御之

なきなるべしいもうとのれいけいでんの

弘徽殿の女御に 一源氏退出られハ警蹕せらるゝ 丑

御かたにゆくに大将のみさきをしのびやか

細 弘徽殿の大臣の子

におへばしばし立とまりて白虹日をつら

太子

ぬけり太子おぢたりといとゆるらかにうち

源氏ハ

ずんじたるを大将いとまばゆしと

細 弘徽殿のほとりにて

きゝ給へどとがむべきことかはきさきの御けしき

細 弘徽殿の大臣のこと

はいとおそろしうわづらはしげにのみきこゆる

源の心をうかゞひ

をかうしたしき人々もけしきだちいふべ

ことに弘徽殿まで

かめることゞもあるにわづらはしう思され

源の心

けれどつれなうのみもてなし給へり

源氏は朱雀院の御前にて

御前にさぶらひていまゝでふかし侍りにける

ぶりを見えてあるかしとよめるをもて君を畏るゝ
死白虹日をつらぬくものありしと史記漢書文選の註に秦ありて
なりしも今源氏と荊軻によそへて今泉の志とげがたきことを畏る
いふ詞也
源氏はさふらひて
をかり
月のさかりなるに
細上の詞にも廿日の月なく
こよひの深夜の事
なるべし
細 中宮の御
ことばなるべしひてと
のたまふ源の詞をうけていひ
かへしやよの御むかへをも
心にたがへるとの心に
いひつたへ給ふとはおもし
御かたにおかるゝ也
下にハ九重をかくへ内裏
雲上を云く相帝の御時
と今の在位の御身の
かくいひ給ひしもの
いふをさすとの事也

細 中宮へ源のまいりて中納言殿未春宮の御前に中宮もまします歟

ときこえ給ふ月のはなやかなるにむ

相帝の在位の

かしかうやうなるおりは御あそびせさせ給て今

河 源氏くに一段哀の心をこえく

めかしうもてなさせ給ひしなど思し出

るにおなじみかきのうちながらかはれるこ

内裏のさまも

とおほくかなし

藤壺

こゝのへにきりやへだつる雲のうへの月

をはるかにおもひやるかなと命婦してきこ

源の心

えつたへ給ふほどなければ御けはひもほのかなれどなつかしう

孟 源氏

しう聞ゆるにつらさもわすられてなみだ

月のまへハ　細うへハ常の句をよ
こゝろへて下のハ源のかたをのべ
さらるへくもなくおかしきを
よめり　栞　此方の哥ハ中
宮の方をうけて月のゆ
かしさぐらり下よハ源氏
の思ひをこめあるを中
宮のつらきいてあらずと乃
よまへり
たすくも人の　細　山陰大守
判者をつぶろ達は露も
人の心をしりうかお裏も
人の心ありしとるほとよ
方にハてつらきかへの心れ
こまくとしき　蓋言
此門方今の御心の秋り
桐壺せさりやうなれど一
次と源細の心おこたまれ事
宮はしのゝされハ味もち
可付服也
いで給まで　細
おもはまく　中宮の御　起居給へ
中宮ハさまくと人給へさと
みがれ給一入も心ある

源氏
月かげハおなじ世の秋よりくもねをへざ
つるまりのつらくもあるかなしき人乃
ともむりしを给けることしめやかなどきこえ
あふ宮ハまゞ宮めをおりこ使もひききこしあてよ
うかのらしと命方しまゝせきまへどあらうを
おかりけれそうなぬをいとうもおうもり宮
うそし給ひ御いひとそ恐侍とのごとを思ら
とおいぞ給ひまぐさ出きこえんと恐侍をかなら
べーうしめ常よ思わりけれどよすゝゝるよえ
あるひをさえし給をあ候いとかへれとこえて
まうり給ちる八乳弁のもじつうしとさとよ

あくし
たる八乳弁のもしつる
おゝ源のかくし白虹日をはうら
ぬうらとえし事く
はんのひとめて　源の御方よ
勝月なるのうまれ不義あれ
と世の中にまうつしきこえ
いうし此御しるん　おゝ勝の方よ
りと源八高信しきか勝月乃
ぬるとまうら性く
不祐の　明　不祐の便よるを疑
つきつるいて将と辞しの心也
元くしく文のとこつきまと
るてころのうされれうら
とこうしの哭しいはるさ
まかく　師　明星の此度思いし
おゝくみ何毎中きさかなか
祐なぐくの抛気ある時八いを
ばかりとも思かりおうてい
ひまりんあうして給ひてくせ
ごしと祇御高信もよくて
行の上れぐまれ八此時宮れ
の感よ侵されてこそ此どの
ろうしやせてく　細　源の面

はんのとあめ世中まぐつくうはかりしおもひ
てんのまざめきしとこづれきこえまりぞひ
さまうりよそうぞ川しかれ世川しらく
そうしきず川よりて物思しきんうれまう
川かるさのころもへよそうと哭しあつりかう
とおうれはおおぐうよ思びさあつらんは
ふあへとみくくくねばはつうひとぐめさせ給
てぐうのみどとうれさせあるとうつあけ
よせあてあるくてすくねとえりいでてつらそ
あどこうこらふひきつくうひあへるあ
しきえんあうと地まんへかうんぐされつう

志と哀傷にせさせより
おぢりよりてそ　おか　勝月夜よ
細殿よりて又おほひすひて来
この西戸の部屋をさそひ給
ひしるはまや　　　　細故宮の
身のことわりさ
身のことわらく御心もしく
すゝろにそゞろなめける
くるこゝろにまかりてそれべ
こときまゝらずなかり
なかりしや　　細 哭孟日
おひんぞて　　細此の御方ハ
くりそてハなくさせ　こゝのこの
後もそゝくかるなるし
お方の秋の御方なくハる
こまかり　師おほひさぐそて
この方ハせしまでらりて
まゝとなりそで　思ふなる一
心のうちなる　ハ　　細 花鳥
為そいふこあり個此語
不及　おわりて　ハ常
よかなくかゝるこの心もか
りまへるバりさしくの御方
の中をすむゝ心地を

すゝんとつきころにあめしさせそてもうひ
るすゝ袖ごりまつそむげなく川とれなり
それ身のこともの心き催なる
　源家　おひらそで志のかつ此の藩とも打えく
ての我乃御方とやこゝろのうちにふかくしく
いつまで見の空をながめし給ひんな
どこまでやうらなるなるなくらうやうなるろう
のうゆるかくひ世月かれど　すきなるらく
どころりこれるそなどころかはいるう
こまざるべしかかえハ後の心ぞそのこゝよ
うらつきなハうのいそさと三夜く
まいつひそさせ給りて霜月のついさ

志ぬへしとく　花人　あまんハさゝしたらるんゝやの夢
あまのさるらんへりや宮ふるあへきぬのあらさんぬ今案れなりやハ御方によりさんへ抄ら心のうま
まゝべ乃もにさらまもさくく
いさしきめの　細 引方あゝまされま御位の事ものすくハいきよく
こゝやうよく　細 ええらとしそして出すかそりきぬあく孟ともて文経の文のこゝく
ないくれて
うやさよさらうし　細 此かんの本来おあゝも方くとそしてあら方多くあえしされたら後まつく
れハらう　細 中宮之御方にまかりて　哭孟日　師 兄ハ故院の御方のきまハあるそあそ子院
の一周忌よりてあそて中宮の行まうで
細こゝは　故國忌　孟 故院の周國の御法事也

らごらうさこきなりの雪いたうふりけり
源氏之
大将殿よりも、宮よりの御とふらひ　細 中宮ハ也　孟日
源氏
別れしかど、けふハそれどもうし人に行あひ
細 故國忌なれハ也
春宮
須磨にいるとのまんいで、みるもみなハ昔が
しうえさるをほどまでおもほゆ
中宮の文のうち之
孟 見えむ…
すずしりの園どハうそれど行くきめぐ
里のあそそのせるを遁らて　中宮の文のさ給くとゝまるつくらひ

まうくり　細 いまめし
さへうとうこ日の花さうが行も
上手なるく濱皇所の年
給ふ一つどあるくやうりの人
つもあちつ下の御ゆ仏八構
よとみしうり　暁 かくう
御しもう川の中宮乃
やうかくしまうしことを本
とん
今うへの御れうすとも源乃
あうが御ゆすとも
おひくうりて吉日よふ
らひ給く 孟 好色のき
とゞうまでく
中宮の御八講たり 細 一勤
云女年定るよ八お
らん 暁 云中宮の御八講
八女年定る子日一勤
不定のよし
ちす 細 帙簀也竹と簀
よわくうる小手など經を
つむ物し 暁月 師河一素
花づくえ お祝の御ま花づく

てをおくねんけきさう海なれどもおそまけ
さうさへせひあしなりべしむくらぐらいま
細人かうは異なりや
めしうへおくねどもへよまへいるよかせ
表一元の日紙のこと
まうりなふいこの御ともおもひけちく表
なう雪の花川くるよめれくとうひ給十二
二月十よ日ざうり中宮の御八講なりつく
五日或一二日行なりてく
じやうくうし日ごとに供養をさせ給御経
よりつじめるの軸羅のへうし表紙をのさき
あうもよるなうさ海よく々のへさせまくり
何ぞかをえれてまのよんく
さくぬうしのきもうるよせ乃つねあるべく
おりしませべおしてことつりなり伴
荘厳
くぎうり花づくえの御用いるどもまで御しての

ととうりねよきうくし
經や仏具などもゆう花之
先帝の御まうし　細 友壺の
父之帝 中宮の又法くく
御れわく八御しあよえ二日
みをしの日　細 ゆ三日也 薪の行
乃おう日也 お 五巻の日よそ
提婆品を講ずるく
世のつまじき　細 人く仏徽
殿はうのるりれぐうを
をわきれてまうるさ
薪うう　お五巻の日志うを
前後の御仏ごしすれは世上
を保うしれ云て殿上人
皆まいりて 河法花採
薪及菓汲随時恭敬與
提婆品捨法義經をわうえ
しるすい薪こうり楽つみ
あうくにうへてぞえし
行基菩 おうたと伽陀よ
して行道あるく
おくすう 捧物之 林名院
出ほうう物として金銀の
うう物よ種くのおうね

極楽とひやうぞしめの日は先帝の御
中宮の母后く
れうつぎの日は母きさき御の御ためまた乃
相帝
日は殿の御れうまた巻の日すればよ遊
なども世のつまじき紙えしもちぐう
給そでいとおもさまりまうりなみ方
蓮胎
うじじくんまるえくをふまへでつき
地ら御じまうらちぢめ給れじうふ
ことの案をいぞうそうとしみとさら
捧物をとこのう
もさ殿ぐのかくめうさしげそめぐり
おそ妙道まうく
給よ名ねどのはようい君ど給ひゐうを
細菓花之壺 源氏の少納言く
のましうねよ物れじこしのやうなれども
こころそまう。ずいぶんとるよめづらしうくんを

どはくるまく師 伊勢物
こそかきさま物と
あり

んつきう歩 えつき給
細兵アつきまくやさう
れとおんつく思ひ給
よしとの給く

摂川の僧都
源氏うし西 恵心 号摂川 細中文の
僧都と

ばいくばせんたちて昨日ハ殺法ことを結願
あて世をそむき給ひし御事この中させあるよ
それ人〴〵がやくろうきまね兵アつ〴家大ねの法
ふとうぐきそおくとまりしと思ひぞみてへおう
だの得どよくらちていりきぬ〴〵つゆられ
がいさ河〴〵ものう給ひて〴〵さう得どよ山の
座をしめてづしことうけ奉つるべきより
の給つきそ出をとこの摂川の僧都ちうとかへ
思まそ〴〵ず数うし給得どよ文のうちゆ
もりてゆくえうなきこともりなよとる
きおいかそろへさう人〴〵まよいまえうし世をそ
けくうでハうやしうあうれたらうわざとゞま

してるゐて出家をみさとらぶし給ひざりつゝ
ことなれバみそとのそじくろするこ給ふう
ま〴〵る人〴〵をものゝきのことさ海と家
よかくりとうれそられ神るくしてぞ
くり給けるこ浣のみてきちハむりの
ゆる侯をあけいづるよいきじあゆれなう
うつくりあいうれて〴〵れとあうひゆのて
どおいもらちとちりますゆのしいづくまへき
方もきくられきなひて此得さうれどよろ
うりし人〴〵そそをよろへられハみそとる
いぞ給ろそのちうずぞ〴〵おまへその方のうり
へろやうく人をわげまりて女房ども申

むりしのれありき〴〵
細中文と大細う
しおしとあり 物をせ

こうさしてめし
源ハ何とても薮のろうを
みろくる猿まよそとし人
もあへされハなり

ぬさりなしき 細 人くね
さうしく世絶よそり
くんみされぬへらし
とせ
んそうれめ色く
細 菊ちは勝なりとさ
てく、あらでかされ
かり 哢孟同

ぢをうしつゝこゝろづくまにまゐるより月
もゝ海士ちよ雲のひかりあひさらぬにの海
まさ海よ昔のしくやりひやうらてよりほの
人ぐうつくりむかしさるれいでしのうち出の川
そいゝやうよはやしきてをまでぐらうしはうる
そこしゃあしつゞいまそじめて出しつかうある
まとみもあくぬをかのさはづしかやうなり
つれバんそうれめぐくすぐ例の念誦して
そふてしあやすのしられけるひをそこうつ
どひあふ人のゝあのとゞうひそめやうよ
かうまひすてしもことどくくうすしげ
さのまぐさめげしげよかりらてゆうく

ふやうがうの名つ
細 是ハみその内よ名香
よくさ経よいふるぐは
経ちのあうさこみその
のかうるもし
ふ経しそ海 細 弐アかや
このやすしの経にうすど中
文のもと云ふかし 経らく
読らく 呂経也
ふ在でとしらく人うまくし
細 ちなるのやしくくりて
生きまとしそや也

きこしもちよいとゞしくこゝろ経風そげ
しう吹おろしそのうらのれいのまかひ
いて地ちうさふかぐらよなりてそゝやう
ぢうの鐘も同のかうりあるのにほひ
人かうあひめぐらし極楽思ひやら
おなじのさ海ゆりのまうぶのかつひもまよ
いまうちの経ひしき海ゆりひあやのしさ世あ
しぞなこうつまるもふ人がくてかたや
とゆふしさをやうせおそねばちねぞこしく
もへこゝしさせ経りたしれをもくあうぐさ
まだ入ゆさすゝぬ経されでなほそこく
ぞりくらつゞくまるそへ

月のかほむ 細 源氏雲井
とうけてハ禁中の事くよハ
わうぶ御宇々のお宿所て
物判天上かどのをとあり
ううじ天上にても見と思
給んの心ハ勝くうえ
しもや明ゝの世のやとと
い宮人の御事へハひらく
よこきうへし
とおひさせうりしてひ
かく 中宮の御局のくう
やかしさへりうかしされ
ど思宮の御あしをとひま
どもゆかんよりて源氏
の御宿所とくくやむんの
ひもうきとく
おかさの 細 御こまつ遊宮の
宿さぐひかし殿ハ世のとき
と半よ雲の世へおつ道む
程ずつよふむつさとせ此
伊死かくぞむまうにまて
ふんハうそすきさしさて念
ここと見ハ玄宗の道心を
宿く書宮の御局の一鳥ときの

源氏 月のかほひ雲のあとうけてたてみもこの
はまり
まのやまとなりやまぶさもひさとやひぢまへ 舞ひ給つて
かうてそひゐるく思かり 白衣のお衣しあつるうし
かくしやすしきはゆかりなくしとひとつの
さくしもてひとてうかさへきて宿く 源氏の
もうすうころのちらも御ずまえきとし
わくそしあそんべうあをし
玄宗
出雲のきまつけくハむもい
聞えより
細源子誘之
河ゝ此を地のもきえ川へ白河よこうう 此
などうくしけうひの人々へひかく 今の宿久のうくえありし
衣のさつきせらねどむかしくて 細 二条院之第上の方へも有々
すくまのゆのめてしわが流うする神の 源の退出

肉の一ハめぐまちくて雲
の今きうつ山ハ但しの々く
あいつとの世とハ芝も女王あ
の宿かのこりん
何ゝやりて 細 引き霓
呼みかけんらうとうも
まをとして御後見つて作
わ中し 細 右大臣中井
出わやりて 細 薬ご口ゞ見
まゝ始て御めとお足を
とびふ 何らく可見
今ハくうさ後の
細尼の在奥ふりしそめ
くまりくと後く
もひくとりしひてえんも
細尼ハく くくひ山ま
く夢之池なり記者乃
条きいう

ちうくきて信めとおもし代世昇のとり
うおかぞうてめとしたらくめのはくしのをぞん
ぐふまきたらく光とぞうかおわやけさ悔いを
おかりきそ君しどよの 御のつゆし中くさよさん二ぞうくは
まもりひよなれぞりしの世らてくるうそのへえ 細中宮の一ゝ之請退一給ハ人ニせ
おいさしまれ乞く 源之世と遍退 ほとりもそてころすく、おかし
わう源しくうぞうりあて今いろうてきこの
出てうどぞもたよしそくしと出でば、舞手の
うちまといそぶせお今宵の名も出ゝくる 今宵おもく恥すかしく
よなんまれ ぞ。それもゆうろうくるひ 源もりとし
給ふうしうひ河ぐ寄えまことくもさき
宿すれべもしてぐうるめらひさればつくやう

のありてそ、おかしこうかなるしそて給（細 源のかたさまの事を今のあらう）
ゆるしおはしますを、やまうち給ふをま（弄）
はつまして（すさる也）きこうすしきそ、此身にうし
うき給ありともありそれにとあそし（細 源ほとんと）
こいこうよけんるとすれねどひとして
あるおぼしてしならゆとしもかは（細 源大将もうちうちに）
りぬれば、内わたりはなやかに、ないえん、
たうかなどきくも、物のみあはれにて（春のしるしとても）
御おこなひしめやかにし給つゝ、のちの（細 后宮諒闇にてそ之）
世のことをのみ覚すに、たのもしく、む
つかしかりしこと、はなれておぼさる。つね（孟者人々源のへんさる也 細同）
の御ねんずだうをば、さるものにて（念誦堂 持仏堂也）

ことにたてられたる御だうの、にしの（これ迄は常のねんずだうなり）
たいのみなみにあたりて、すこしはなれたるに
わたらせ給ひて、とりわきたる御おこなひ
せさせ給ふ。大将まゐり給へり。あらたまる（源氏也 細 三条宮へ参る也）
しるしもなく、宮のうちのどかに、人めま（あらたまる年のしるしもなき也）
れにて、宮づかさどものしたしきばかり（中宮の宮司 中宮亮大進少進など也）
うちうなだれて、みなしにやあらん、くん（若）
じいたげにおもへり。あをむまばかりぞ、なほ（痛）
ひきかへぬものにて、女房などの見ける（中宮職務のありし時のやうに）
ところせうまゐりつどひ給ひしかんだち（昔はかうりて三条宮へ参りしと）
めなども、みちをよきつゝひきすぎて（此御方へ）
むかひのおほいとのにつどひ給ふを（細 三条の右大臣の）

……ぬへきよし
数毒ゆ藤こうかなふ
ハ源へ活ぬるりなき
し

ないえん 細 内宴は清
河 内宴 昔唐太宗之旧風也 嵯峨天皇弘仁三年於神泉苑覧花樹令文人賦詩是始也
たうか 女踏歌は毎年正月十六日にあるべし也 男踏歌は正月十四日也 毎年にはなし 行幸巻よにくはしく見ゆ

あをむまばかりぞ 細 白馬
正月七日なり
細 今も中宮へ引く也
河 権記云 白馬同参中宮 給酒禄於寮官等 これは
奉る年始に白馬を見るは
邪気を去と云ふ 李文十
節録にあり 見るを吉とするは
而るを見也 馬は陽の獣
なれは年の始にそ見侍従
あり

むかひのおほいとのに 細 二条の

大后の御方也　明　二条の
おほくのすく三条殿よ
しらむもひとりけ也
千人にもかへつべき
孟　諸人右大臣の方へ参るに
源一人中宮へ参り給
ふゆへ　細　源の今参
る人は御身一人当る
にもかへつべきと也

かゝる事なれどあはれにおぼさるゝに千
人にもかへつべき御さまにてふかうたづね
まいり給へるを見るにあひなく涙ぐまる（感涙也）
まらうども（源のさ思之）いとものあはれなる
けしきにうちみまはし給ひてとみに物も（中宮のすくせの母君のごとく）
の給はずさまかはれる御すまひに御すの
はし御几帳もあをにびにて（出家の身なりかたし）（蓮　鈍）
ひまくよりほのみえたるうすにびく
ちなしの袖ぐちなど中々なまめかし（出梔子　孟　共以出家服也）
うおくゆかしう思ひやられ給ふとけわたる池
のうすごほり岸の柳のけしきばかりは時
をわすれぬなどさまざまながめられ給ひて

むべも心ある　細　なまめかしい
[illegible]　後撰　音にきく
松がうら嶋けふぞ見る
[illegible]
[illegible]　細　[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
細　奥ふかうもあらず
孟　[illegible]
の御座所[illegible]
[illegible]
[illegible]
細　今源の
ありし世の
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

むべも心あるとしのびやかにうちずし（源の誦しのあく）
給へるまたなうなまめかし
ながめかるあまのすみかと見るからに（源の歌）
まづしほたるゝ松が浦しまと聞え給へば
おくふかうもあらずみなほとけにゆづり（藤の御かた不のさ思之）
きこえ給へるおましどころなれば（藤の御座不とれは儀なき也）
すこしけぢかき心ちして
ありし世のなごりだになき浦しまに（藤壺）
たちよる浪のめづらしきかなとの給ふも
ほのきこゆれば忍ぶれど涙ほろ〳〵と
こぼれ給ひぬ世を思ひすましたるあま（源氏の心　細　藤壺中宮世を思ひすましたる）
君たちのみるらんもはしたなければ

まや新しきる也　第日
明日後ニ云ひらく待浦待
一年のへそて月まつり
仙語ゟり御くわしお
世のかみをそらくにう
てれつくしの待こそひけ
よりせるくむ甘四之
すみつけてり　ありせられ
盛衰をもろりまふ思し
ことく文　細吉凶の傍附ハ
思のうべき　ハくとも止ハ
ざりしよ其今毎の細
おひのきさまのしまも
又一ひよくひすさとおめ
さらや
つくさめし　細　家まそた
春の除目とてもさしてい
かし　藤春秋の除目なる
れい外官除　県召な
規八縣召とて秋の除
目ハ司召といふかたり
てハえたくとつくさめ
しえハ推量とてうよ

一　こゝろぐるしげなく。おのゝめぐるしびみ
くねびまさりぬれ。心ぐるしう事ちく
世まうる人。時よあひ時いうひうれ
ものめくあをつけてう世とむがしとる
んどしもうしれ。まだ。今いつもいそう
前しきめくだのすきこしよつけ
ても物わられかうてしきさ人へてわきまへ
るなおひむすうんぐうしもあうれおほく
かいむしれうへてうらすきつめてせ
ゆ家もおかしとよほかりつうさめ
のうしろのつやの人い給かうべきいうき
もしえでゆかうしのぶうまやまてもあれの

いつれもうてへつくさとのふるまうれて除目の地名よいたる人も桐壺がりのうしさるう
欽明道遠殿の御趣義ニ曰京官の除目なりがしうそいますて去年のるりしやゝ宮
たりは後の末の頃よいひ家のつくさめしまりうれい此ちまうやつく
是い此比理運よてなうべし又去の所ハし京官神とい此比いふうや
さうのびうこと　細さるよしうて加所加階さんべき年労ある人も只今中宮よ給依
おの人ハずそ給白されあるま加階ちでもせむうし所府の中宮の御給にてあるべき
とおもらりしとゆへ
いまうり　細三宮の年爵
とをうり後の御給も同
事也御院の御給ハ此次
中宮云掾ニ人目三人ら
中宮の御給も同し拾芥
かしこの春年給とハ天子よ
り院中宮東宮よつよ
るくる諸国の掾目を
の官位を給て其ハ爵禄
と取て後中宮あるつく
るうへ蔵を年給とも
年爵ともいふ也
りてもいつしし
細御出家以後も中宮職
の召るうりもなきとて
とよう思てつりよる事
前のきうし給封ある不

はいそうづかうそとぞうしれあうべき
ていなどとふるを欲たどもしておぼけ
くさひいともうらうてもい川
しうしけらしるをさうらふなどのと
すべきかもあしめとしつけてく
けうしおかうられ出てはがしむそ
くしせられど家人たちもしうすうけ
よううしとへるなうしれども又つけてく
ぞ。はんかうくがれど。親方となる

四十五
四十六

官位也。入道しぬれば入道の名をのみいふ也。所くてもいつしきとはかはらず。中
宮の出家しましますとも、いつしく御位よりさりて中宮職にかへりて、御封なども御
ぐし落しすぐさせ給ふ時、出家しませば万事おりやけおはしまし
まさまふく　河　御封太上天皇二千戸、二宮各千五百戸　封戸ハ民戸也　千戸ノ万戸とえいへ
ども封戸といへる名をのみいふ

これを　細　主上の御事
まことわくまうすと仰り
念しやさうる也　西同
我はそのことをとゞめ
貴の代世の跡にまつ王也
御発とつとめてとくし
その河をすくさめ給
さんなもの人をなのずを
いのりまかれいまうるに
御心おすこしぬ世と法成
忠信ならし
此殿の人ども　細　法成寺
の人も除目よりかたう
人おかりまし

こよなくてもしまゐの御代をさらしくさ　冷泉の代よりてはじまく
世しらさばとのことありしつくばひとる
ひとへにすくつとめさせ給ふ人これをあや
しくゆゝしうおぼゆるしまふこしはしもれぬ。
我はそのつとめをりつめてゆるしたまへと佛　やうけ
と念じうさうしおはしまし河をみすぐさめ給　法成寺
ふ所もおりさそてまかりまですこしもちやうと　我のみひけどもしばのさとく
ぬ御きて。此殿の人どもえ世おぼしさ後をなら　法成寺の人はをそく
らさこしのことあれ、世中わりしますくれば

致仕のつらし　細　示依る所か
不得用ヘツ明　曲礼上ニ大夫ハ
七十ニシテ而致事ス注ニ致其職
事之事ヲ於君ニ而告老ヲ
愚按曲礼陳澔註ニ告老ヲ
云致還其職事ヲ於君ニ也
しわり致仕しるハ七十に
なりてお仕をもじれよよ
アて此る用ふる車とも
え細の府ニかくすうすあり
これ。懸車の懸ともいふ。
表とハ明也標也上つき
る文と云ありけしありく
主上よさしうなすろ也仕へ
をやめゆ家にえるより去
てまうる一元致仕大臣ニ
左大臣良世寛平八年十二
月元九日上表致仕左右太政
大臣藤原實頼　清慎公　安和
二年正月八日上表致仕す
此事之例也。その御代の
如くしと云へハ良世の例かと
時也。又清慎公致仕の表
をうての后日八月十二日

されてこりゆゑ入たの御よへじをしおはします　細　基久上のゆめく
けらさうし。あきさ人まいうせのおりきなよ。
めのくおがりてらドのつらうそてれうら　致仕表
給ども。みかじは致院の御人がしくまうを　朱雀院之　相帝元大臣を朱雀院のしろうにうつべきと云也
きちとしろてあがりてあるがき世のこと
めとどうてあ給しは遣ぞとゆがりぬてく　とき　ゆいごん
よさぬそてさきものよせひゆるしまへ給ふよ。　九大臣とのごとく
ひるさうとくしひくまらるさせさ給へ
ねどおとうへもしヤまそて。こりかねまぬ。　九大臣強て辞退之後字也　致仕しまうく
今いっとひとぞうのことうをくまちへ　細　二条の大臣の一族とくうゆるとく
おのしうぎうるし。世の中もしとものし　天下のうごめく
まいる中しどのしく世そのずれしかば。　九大臣のごとく　朱雀院へ御むかひ

一円融院良経の時ことに称没ことの引入大臣とは此巻に致仕し給てみまかりし此巻
まに冷泉院良経の時称没こうりえし給れハ諸説その致仕の例にちらさりきさよ
や

世のまとまりをさんくま
細 二条の如く世のおに
師 帚木巻にまたのおくの
いさりりしつきさかすこ
かハ此君も顔らくさくと
おり今を経れくなら
しく
ありはされらやこのまたあ
つうさめしかもとれぬまと
孟 三位中将中納言にかち
へきことてふくの君にさひ
つさあのもとたえ大臣曲子
くさひまふおすまさはる
せんとつさめしまさし
まかく 細 三位中将今中納言
ありも思ふをてきとをくるあさ

やけもんかそう此ほさんかのへとしんわ
井カさ前之 ろうさりえなけらそうけこともそい 細 右大臣息元のむすこ
づましりすくへいくめやらてく世よに
らあうれてからしけよものしおし頭
細 代うらう前 こなよあうちかりてこ三位中将みどもと 白 細 葵上の兄に
世継ねりひちかめかさ海にてよあてよのにも
ちとも本なれぐるようるよひつめ
ぞ海しくうてあされしれバうつとけ 二条大臣中将を
賀の中ゆと思ふ給く ころれしこのしらよをいま給る源氏を
ひきれしめやこみしひのつきめしまふ
三位の中将なるも思ひねんく りれぬまごいしらこ此りひつれどたる 源氏

こと 河 其の陰国よ中納
言おしに任られ申何
三位中将も称宇る定
みさひしや但義の義
すらハ各別のこの世
ゆりてことけりし
源氏威ありしまへやう
よおかりより又ハ我す
ハことりとく

春秋のここちやう 河 春秋
河藤経 細 二条の河藤経
ハ私にハ初さる刻なとさ
とれよ源氏の君給死に
衆 是ハ源の物語く世守
在こくよハ京のりくみ世
たむかてさき 孟 古集の初
の韻字をかてさきの初の
字を撰して勝負とぞ
あく両上古撰韻為宗連
内を不好ニ見家範朝臣記ニ

かうちかめて此ろ源のよ世いとらうさ
りのとくしめたとおしてこしいうとやが
源氏へ中将のまへし給ハまあて まてつねよまうへひおうぐきん 其の 向
内務に とおそひともりかのめし給ハいめし 孟 源ノ中将をと 帚木より
かりしるく菜を捨く へとあのらうおしきまてぞくとうてし給
しと此ぼしいぞくここをはまたうか
さこと此つけりいさてぞうよいでくきへ
きやう 里春秋のくこし経とばさうかりのかたく
此河にとおもふとりてハ まるんしかもこ海くうつしきここどくも
とをさせ給かなしてまかるこいぶくうり 物見と申すありねくをとし
いと海ありけちるくさとりとめしあ
海賊をしてき 河 海 韻 博士
つめてふうつくりねむやふさつさわさや

世中ハうつろふものをしく
細 世をりハやうりく讒言
ともののあるや評 此だ
かくもの常の序なり

みどの
二条河原の文庫也 文殿く
蔵上人も大学のお
蔵上人の中に儒学する志
ありて人に文大学寮の儒
者なりしともいふ

うのすゐひたぶきとしなきを志ゐすくらく
ろ絲やまとくえつくるものかさくし給
ちんだにこんよりもせてじらおそび
てかとすると世中ゐ皮わろくうさこ
とじをやうくひ出うへであるべし
文の食ろどうようてつれ゛ふかつろ
中ねさうべきふだおゆくことそてま
いうまうりのゐものあけ゛せまそ
まこむくねこけしたのめくらし説
古集のゆくなしねもとえりいゞく
させまてそのたろへでわざとハあしね
じおゆるめしうり蔵上人とや大学の

ひかりさきよこ海とりま
細 對座よ思座あるて
西 左右よわれこれを對
座よあきとりて書よ
抄 細三條取放れ素

中ねまけわざ
勝負の時ハ何そてもあ
あるすなり負をよ
又一座の人と饗ある
るなり

いとかりつとひてひがりさぐこよ二個
じりまうこわりるせまうりけものゝどゝ
おどいとよるくていどとあへりふてこぶ
まそはくえうよらうとみんのりすいと
おくてえしあらいうせとももとしろま
とふ所じと時ぐうらの給う所いとくよ
さし人給ろんずるをさうべくさしそてしるれ
のとじんよとくれまへ身なりとめで
やまつるよ志まけよそり二日つろ
ありて中ねまけわざしまうりこしく
しうハあしそでう海めさうひろりこ

掛物
博士
撰び家ども数字あるべし
源の何と源よりて
細 源の三更とうろん
ものされども
えし
生つきさうる天文之
細 三位中将 みけ方へ 参月
檜破子

こゝのりのさうび
河 甕頭竹葉経春熟
階底薔薇入夏開
中将のはまれ
孟 後八条太政大臣 中
将の次郎 君也

どもうけ給はりてそのかみを例のやうに
ならくめでて文をすゞつらせ給ひしのも
のさうびかしきつりさくそ表紙
ぢらうりを恭のやうるゆりしうう折なり
よいらしけあそび給ふおのたこのごと
しづめく殿上一ちう八川九川のそ
まいとゆりもるくさうのかえ心さまで
るはうに川くらしそりてあそび給ふのさ
とうへの二らうかうそうへよの人の御も
つるよせおりてゆかくしよしいへう
こゝうざんをうとくしうゞふしもれ
しそしわそびのとうしうゝれいう

さゝさごといひて
孟 高砂 催馬楽律
長生楽破 河海ニアリ
河ハさゝさごのさいさごの
そらうたふ御様御前
二段それもうしさんまし
もつくまじきもし 三段
下略
うもとのくるとひくを
羅直衣をめして下よ
単のもくしるとどめ
しさうや
あへましりのとさゆうへの
細 高砂ハ七段の歌之
の頭之 師 催馬楽よハ歩
さひくあさうくいがに
あへましりのとさゆり
ぐるのとおうぞれとさ
ゆりへのとえへるかうす
こりてるもるよおうるを
此物語よりそ
わり
それまうし 細 中将の君之也

まゐらさごうたひてたうたふへしり
くし あねの君はぞめでてげけあれい
まりいうしるきれまゐるれうかのめかひよ
かりのたうくさゆうとりのくすをひろへ
とうつくまよきさう海人るつゞきまゐ
していさしうさゆかとよし売さら将士
どもかしよくそまりて源地らし
つねうりあてましりのさゆうくの
とうふとちあまゆ中将れうそりけまゐり
給よ それもりとけさかしうけしさうがいなる
きうしね まかいかひそぞうゝ但しぞゝて

しゆろ訴の句也 保の詠形ハと銘ひく歌ろ数ろも…くひ…也 深のうちの
薔薇と云ふくしよめるゆゑ…銘ひく哥さろし八古今抄名部ノ詠ふひをわき
ハ…ひろりそろひくとしよめる…深のあも同し 時旧
古今物名ア…ひと我…ひと…の名とか…

とり…

佐の
向ちしそでと銘さく花もく夜の屋よ志
ふれよそ…しゆか…ふ…
…
…

…やすくて 細 保と秋乳を…明時
よみあへるん
こふめいそでつく
細 那かまか…也 作 保
代…られて…も酒
とき…中棹と
…
もう…
…あり 細 記者の筆を
人くの…しとい三
首のおよハ…
…
…ゆき… 細 いす
おか不…
…の酒の中…
よ…
とも…
しかく…

…

貫之

…

細 芳保と…

とあるせろ事あるへし
…ある事 細 …
…
…
師細の説用へし一ひ…
文王の子 細 保も自省結
也文王とハ桐葉よ比…
と禁雀…
と周公旦よ…
河史記魯世家云周公
戒伯禽曰我文王子武王ノ
才成王ノ伯父我於天下ニ不
賤矣然我一沐三捉髪一
飯三吐哺起以待士猶恐
失天下ノ賢人ヲ云く
…
さ 所…
…
の…
さ…
成王のか…
記者の…周公旦の…
成王の叔父と…

詩賦之

一保の…

のもしら…
んちみ…文王乃子
武王の…
…成王の…
の…
…
…

…

…
細 …

冷泉院も源の御子也くれたるゆへあるよしにて成王のふみよハ宮御方を何とか
の后へすましい入せ元高後ハ天下を保とみてくらり愚云それの院もさながら不及 師 宮ま
て八冷泉院を成王にたとへたりこれ其の例にも示文といふとのみ見えに寄して何れハ
源氏伯父にそへおかしけるする 白鳳也又冷泉院の御世よたゝりて世の政をとる源氏の
うへ摂政にたとへしくを周あらされ冷泉院の御世を摂政のやうにわきまへもんを下
に思ひ成王のかたよくの給ひ人とをしらんといふ也
されへろやさくるもろりしみつられ 孟 家子て奴子泥く 師 源の御容状名字伊尹有
皆みえしけきとも冷泉院のうれしかりけるしくりハへりけりみつりんとく
其アマ又も 細 此巻上の又之師の意と知るなかなりし其の其アマなかりの道て書記

はかなしきこし
箋云しの三字被入の
哀の心乃餘語なり
師 源とりひろしるにや

おさ〳〵かやうのことまでおぼしたまはん
やむごとなくてかるがるしう御座所もしつらひ
て（脇の庵平念之）いとしうお給ぬれど それもくらまうされ
おぼえよれいのめくらし給ひまかりとそまぎ
れてしまてよりうすきさふ御めくるみたくさ
いのし給ひしふうめれおぼさくしきに給ひ（脇のあり〳〵き）
しまゐる人のならしらるみやうしてやさく

よかりけるへるほどいとかしげなりきこさ（加 弘徽殿 源の后）
（大后也 孟 弘徽殿と勝とは）いの宮もひら〳〵よ御やうまうるすればいけ
ものひいと御そうしくれどもうしこしもま（物ごとのうらるきこゆる）
（何人の心思ひく也と）さう后くをるればいと悪びてもとひらきぬら
ゆげいはなきまうら人ともあへかめれどもまう
らしうそて 文 女はさるむしとばけいを段（弘徽殿之）（啓）
御ぐゐる御りひりけりそぬよ 西山はかま（二条右大臣之）
御ぞうくしうあらて 誹 いろうかすりさ（わつらき 細 二条の右大臣の表達之）
らく 嫌 よ そのくまうんずらやうやうつらきまきど（悪后の交司ありこし）
すらさはどそて このうるさきこの人めまぜ
く 女房たちも御らでまよひて らうくつどひ（源の御おろかなることし）（勝月のそへたらうくし）
まうるよいとよりるすく 御給りんかさなくて

第しきさう人ども
源の御まゐをみせし人
もあれと悪后の心に御
みも甚しくせらまり
人すれてゆらそうりて
やまぬなり

うらみまりのと人
勝も源氏のおほきこのむ
まりあるに、前の事を中納
言のたまふと云々中立せ
しむるなるべし

相承の 細 織りの事の書には
まぎれて書く侍りた
まふと見えたり せ

中納言のまけ 勝 二条大
臣の息也 細 中納言は弘徽殿
の兄、宮のまけは皇后
宮の亮也ときこゆべし
孟 勝月の兄弟也

あけぬれば、帳のめぐりのみなみへこそぞけ
くだしぬるに、しばしもねつかずつくお
ぼさるゝこまりの人々さりげなく見き
まじく侍るなりや、夜となりとや
めでたきよそほひにて、まほにさま
ねるほどよかりけるはらめのまさりたな
てえ見つきぬるよろこびあふ
いりぬるてゝすひきあけ給ふよいかなる
いとうそおりつる夜のみ物よ見まひゆ
ましなかしく事うこそなん、中納言のまけ
すくふひつやなどのをかしひのま
さしよおしつけるはなるかものとまされ

けはひぞそくしと
孟 若君の御前へ 師 中務卿の
けはひまゐらせ給ふにまかせとく
くりかへし

あなかしこまれは言ふね
何とそれ御覧じのあるとま
へるとそうわすかの句也

すずしの人さまへかくる
おま侍従のもとへまいらすめぐく
ところの御ことおもほえ
御形見と御目録とのそ
のままつくしきせのまへよお
かし

みなくじうと さうと
こしへしかたにつ卿へ
源の御手習かなへし

ゆもたの女房のは首様など、めかしくら
べられてまいらせたるほどとまれます
げないひとそくとはまかしなんの声
いとおびしうさぶらはれて、やさしくあゆぶり
出でまゐりてのおとこらはるなしやま
しうめでたくあやしそのひて、おもじ
気色の例ならぬ、ありけるなどのむつ
しろしめすのべたまふ、いかがとの
さまよ、うちとふこおひつかひの、ねざに
まいられて、御さいぞうれさうぞうけ
まてかやしともかはよみうつしかみの、
て、あひなどしうら御本丁のおりよ坐ら

みつれかりて
かれまうれ誰か是
そらんかく

こゝろもくあり
細 こゝあけのハいみなり
くさくうしくまりよ
べきとひやしの材の是
みちあるまなしたる也
所裁子みこうとはそ
駅しとおり人々き今
とハまた世ありて悟り
まへらうそし是

さらなり。これはうちかわ物ともぞこそは
心ばへなれしかれはしれなぞ。なしさこ（大臣の勝よのまゝに）
とかくものゝきはあはれなるかれかりく
よろづとしていとかんとのまゝはずいら
そうらでかぎもうけしまへるまじから（無勝も今ハ府すまう）
つまべきこともなかれば、いとゞいへりて
給ふも我心もあらでゆかしすかるところ（草子記く）
がくをもいかりしとゆかしとらんしとさ
ぶらりの人は、ゆかしくさるへきそうし。
されどいでたちよのとめくもならせ（草也古ゆくてく）
ぬゆへのゆかしもまはざすかりで考く
むかしのばいかり給まへ院本ーしかりられ

りしきかりく
源氏殿の御事とかや
至り身のうへとも知まえ
くらすべし

ますへ君よいといくかりしひて。つゆのし（源の御心ハ判しく好女ナル）（源の是）
かくれそひわりつかゆきとすわかり今ぞ
やどかりかいさなりてどうくゆきこう
これわさまりうめる海名うら給や（源とふ付そ付くの大之）
あかれども知るりそゆはいかぞうあく（無面人）
り給へんめとくらさこうしらとはれいひて（細 こゝさてんの御方也）（勝月前）
しかこそとりてさんでんへさりまねらんの
君はかれのうらしても、あべくゆ絹さ給（故右軒の大臣）
大殿にもいとかしうつるまうとしかまこふ
まひのつまらて人のりごと紙をくんとを（細 源ハ無きとうく恋る給）
なしくゆかきど女君のうらづらし
添文しら紙とうくなくさめらくて給かへ

ごあつて所地をせむ
おりつすとくりりのと
さそうらくしさせ
との幸任をいらく
ゆりくとあみも
孟かりのまし仁弘徽
殿へ御さうらけり
かりくのまり 仲ちら
太后へもくの御し
あち名の御徳なり
孟深氏の御手紙なら
とのゆゑつく
細さうしも仏ゆるさん
とらく孟中納中大臣の昔も
然ありしらく 細雷し
さもこんとよひし時を
仏もとの絵へさりしと
三師 叢書にさそもわ
人まゐらく口かりて大
とゆしくのまふ給ふしわり
孫を解ゆもと知り
ゆかりくも附は孫の脇

いせりひのまつよ。こゝちさう所地くとも〳〵上
よ。いてくれいのはひゃくさ人へそひかよしれバ
そうまでとよふえとくら〳〵の給ひ人ゆらく
とゑもうれへさてし給ひゆくのこし
さん絵とこのさむひとくなく名の出そ
かりそうしも心ゆらされておゆきかり
ろうしるれど人へしよし川のつらを
ゆらしてぞもらんとひ給ひしおりいで
ろもとめて出ざみらしげすまそろさし
あしへやむかしひやひ給へししどさら人
ここよしそいそで世よけがれさう花地り
ゆ門あかりさ給そのこそぞ国いのごとく

まさの人々にかるしあらく
てとく
世よゆかれさうとも
孟 孫の高通おりもさ
細ゆかれ弾きりては来
崔浩は地らし雅要して
を打てそ内給のこと
ともまで世ますて之

世あまあのことおまた
細飛鳥を仰らりよも
さいおくしくさひりと
之 関 わりはあしくは孫
ひるまは作職かれなひ
うそりしも劣と思
ねうりは妻孫つしと母
らせ

なりおひしうる代そのゆくたらあらて
おぼしも
づりさら女法名でもつらと御らぬそご
よおりずくちおしうまずあるよおまくこう
まくしさ人給それむさしよいていらく
さん地りひかりゆるり給ちぶ地しこ凡例しハ
いひすがし名名もいとそらしくぬけ仏
おかりそらり新院をもうすび出わく行らし
つまのびよは文りくらのまあのどしてくだ
きあうこしけど人のこらり給しよと
世のなあのこふとおしくなぢさめのよらこし
ましまずらこしけれどいもこら地も
ひやうゐくりさふそでられどしかすん

くさのひ侍らさりつゝ
おせしよゐる人ハ定かなり
ど源の世よ云られつゝ
人々われいつさ[illegible]
ハうじとうろへ[illegible]
こゝし
師源の君を[illegible]の服喪 細 大后之
しきさ付て后のへ源
のふくさのそ[illegible]
みかどく世ゆれし 細 丙门
とるにも思ひ給ふ時
弘徽殿の通信の
[illegible]朱雀を人のお
あづらうくこゝろ也
[illegible]さるく[illegible]
師 葵の上の[illegible]ハ
桐壺の更衣ひきの
大后のさこ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible] 細 二条の
[illegible]

とさむれいかくくとわめの志こそをかすいか
[illegible]
[illegible]
[illegible]
のこさ[illegible]
ひうしまされ人へ思ひ[illegible]
葵上の[illegible]
御江の[illegible]
まとめとこのうち[illegible]
細 朱雀院の[illegible]
てまん[illegible]の源氏[illegible]
細 葵上を源よあつせ[illegible]
[illegible]服のそひおしま[illegible]
のまとまと[illegible]
[illegible]
[illegible]

されもくおやしろや[illegible]
細 源氏[illegible]
されの[illegible]
とそのかいすふさ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
人のこゝろ[illegible]
どうおそ[illegible]
よこそへ[illegible]
ころとあ[illegible]
けの[illegible]
[illegible]

ても何とかくしてこひわするゝかとや
さりけれるさかなかりし人の　抄源氏を葵上とおもひかけし時鏡作るり
つらしとおもふこともありしかど人とえんし
人のこゝろまよふかしあらぬ　源の玉かづらをおもひやりて勝のゝすた
りけれども
云めそわが心のみならずよ　細　人の忘れぬと名の乃義く　抄　勝ハ源之定家道乃
あはとみか心川ろさふかくいは云へるなし
無後のけふりハ　細源ハ玄宗の官女を此事をいふ
さへしとせ

ますらよつらあしう
細　二条大臣の心也　抄　源
さめけく井しう何とかく
云つろそとしく　抄　此哥に
大臣の分別御来ておほ
の中しにつひしを後悔か
ふかく思ひかけ給ひの心せ
なり人のとしへたり
さられ玄らし給ふし
孟　さられハさえおもひまさ
の御心　細　大臣御心後悔
おもひ御心の中をさそ
ハ後悔く
抄　かりに川さしくとさるのこ

べこともよかんあめかと、ちゝく
ちりの深ひ川く、ちるよ、さすが
わとおしうかたにとこしいつことづと
かがうるれバさだれ、忘れじしびてとどら
しぬうらじ、内かともりそきせ給ふ、か
くのこゝとつて給ひしと、かがしもそ川
すじなとしのそのく、あすえんて　給ふ
云さくにのゝふく
孟　さられるもの御心
孟　深罪ありもこ

此句勝のゝすとそり、源のゝすハいひかくしまかとをゆ名君一句用心あすしさゆへ
めすへく　細　勝の玉くへあすてへ給ふへし　明　姜曰此段一向よゆんの忘乃を
すりるへくさかり、此川すき川すきさの詞ふかく勝月夜よ守りうう
うちゝくにせり
細　よゆんの忘とも判し
又源とも連てに教訓
さへそとく　明　此段
何よゆんの忘乃るゝも
源し中わ忘れハ教訓
おゝんそにあらぬ流在む
もあのこゝろれハいさ
かゝりて名と勘ふ絵
かすり一句源のゝすハ
あるとよりとちらう也

忘しうらくゝりせいし乃絵そんよるう
給ふ源ぞその源よハこ川かるあさ
りを給ふんなとふく（よ）すすまへ源
こと忘れたもしるそもかそろしく源をひ
大君の宣之
右衛門も
と示よれもうく人すまかろうす
む承ゆうさていりあとゝあらんハいさし
源氏のし
河　軽薄也　抄　ゑろかわさくりかよらめこ
ゆりのやかしうすこれそさそもれ
細　右近のゝゝゆへにくあやめし
かしやえすましことそいしうかなむし
くこの川いくよさるへくさてこころへし
うまゝんしそんよゝさくさまうりかすり、
六十二終

ゐがりめぐらしまくへし